

廃蓮華寺（山路堂原）

創建は平安期と推定されている。天正十年の秋、長宗我部の兵火で焼失し、廃寺となった。明治の頃、寺趾から銅製の椀二箇が出土し、仙光寺で蔵している。

廃福智院（中島桑ノ内？）

江戸の中期頃まで中島村にあった寺院、中期に廃寺となった。場所はさだかでないが、桑ノ内の地蔵堂附近が最も可能性が高い。

廃園能寺（森藤壇）

壇集落の西南にあったと言われ、寺趾は畑となっている。年代は不詳。

廃松寿庵（山路東原）

玉取山西麓にあった庵で、江戸期には大仙寺の遺物薬師像を安置していたが、明治二十年頃に庵となった。玉取山は昭和四十年代に、山土採取のため削りとられ、その姿を消した。

第四章 産 業

第一節 農業

一、藍

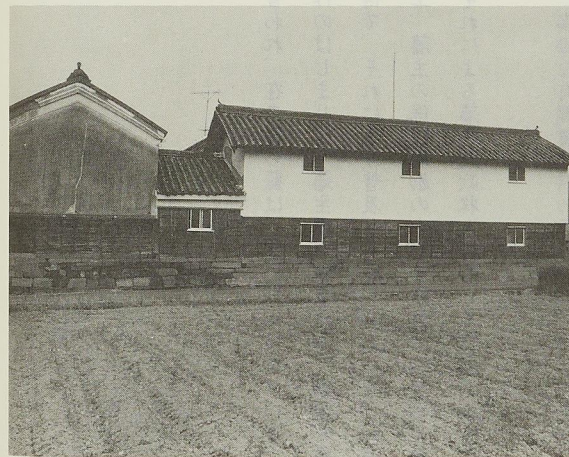
阿波には三好氏の時代から藍が作られていたと言われ、在来種の藍は、室町期にはすでににわか方面へ送られていた記録がある。近世における藍作のはじまりは、藩主蜂須賀家政が、麻植郡呉島郷に、播州藍を始めて移植栽培したのが好成績を得て、それにより普及されたと言われる。阿波の主要産業として発達した原因は、土質に恵まれた上、藩主の保護奨励のもと、耕作者の努力と藍玉師の技術開発、藍商人の商魂によるものであり、それによる藩の財政収入のしめる役割も大きかった。

藍栽培には生産者の研究と努力が積み重ねられ、高価な有機質肥料の干いだし、にしんかすなどを買い入れて藍畑にほどこし、灌水も必要とするので畑のいたる所に野井戸を掘り、二人一組となつてつりあげるツルイによる灌漑用具も使用していた。

農家の作った藍の素材（天日により乾燥した葉）は藍商人が買い入れ、寝床と呼ばれる土蔵造りの加工場で、すくもという製品をつくり、これを藍玉と称して全国へ売り出していたのである。藍の寝床であった白壁の建物を今も見るこゝが出来、ありし日の繁栄の名残りをとどめてい

る。
明治二十年代に入るとドイツから人造染料が大量に輸入されるようになった。価格面で安価な化学染料に打撃を受け、それ以降は阿波藍の需要の減退が来た。森山で幕末から明治にかけて藍玉加工をしていた藍商人の家は次の通りで、常に屋号や称号で呼ばれていた。

森藤	地区	姓	屋号及び称号
壇	一宮	はなや	



すくもを造った寝床（内原）

森藤	田中	後藤田	三(かねさん)
山路	東森藤	土岐	とき
橋本	橋本	鳥田	米屋
寺谷	寺谷	木村	全(やまも)
橋本	橋本	松尾	(善やまぜん)

内原	西張	石田	ねばや
中島	西張	近藤	こんどう
東部	桑ノ内	桑原	泉屋
大止	大塚	おおつか	(一)
三木	マルゼン		

一、養蚕

明治二十年頃より農家では藍作の副業として普及されていたが、藍の衰退に代って、明治三十年代から鴨島に達摩製絲が操業をはじめ、その後は続々と製糸販売を業とする者ができた。

農家では急速に養蚕意欲が高まり、村内の耕地のうち桑園の面積が大半をしめるようになった。大正九年には徳島市から鴨島町へ蚕業試験場が移され、大正末期から昭和初期にかけては養蚕の最成期となった。

昭和三年には森山村内の養蚕農家は四五〇戸を数える程となった。県下繭収穫高町村別番付表を

みると、森山村は前頭四枚目『徳島県知事官房統計』に付け出されており、養蚕の旺盛の程がうかがわれる。昭和五年森山村繭生産量四万四二八六貫（一六六六斗余）『徳島県蚕糸統計』

蚕の飼育期間のうち、最も労働力の必要な時期には臨時雇として、季節労働者をつのり、その当時は蚕飼さんといって、香川県方面から多くの人達が来て、大きな養蚕家では住み込みで働いていた。

昭和初年頃から、中島の県道浦庄・西麻植線沿いの南側に、小規模ながら石田製糸工場が操業を始めた。女工員三十名程の個人経営であった。昭和十二年頃に廃業となった。

昭和初期頃から人造絹糸の進出が始まり、高価な絹の市場を圧迫しはじめた。加えて大平洋戦争に突入するに及び、労働力の不足と食糧増産の国策にそって桑園の桑は掘りのぞかれ、養蚕農家は減少して行った。

戦後は化学繊維の進出により、昭和四十年代に入ると、森山では天然絹糸の養蚕は遂に姿を消した。

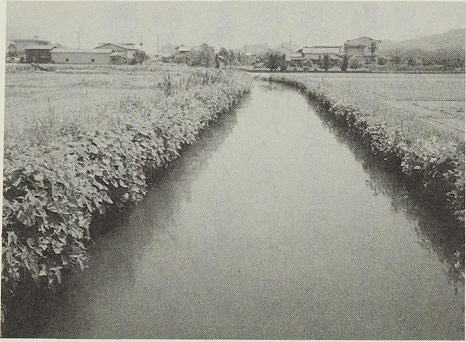
三、米 麦

江戸期には水稻の作付けされた所は、森藤や山路の山すその谷水を引き入れられるわずかなかぎられた場所であった。中島では飯尾川沿いが川成地であるため、水田はあまり普及しなかったようである。このように水稻作は自然灌漑の限られた所だけであった。明治以降は、品種の改良された陸稻が自家用として栽培されるようになり、裏作として裸麦が作られ、大切な主食となっていた。

小麦は自家用として団子やそうめんに加工して食べる程度で、販売用の量産的作付けではなかった。

麻名用水が明治三十九年に起工し、南北の二大幹線が完成したのは明治四十一年四月、同年五月一日に幹線通水を行った。各支線が竣工したのは明治四十五年三月であった。

森山村で麻名用水に利用出来た地域は、中島の田畑と、森藤では東森藤の一部だけで、山路は地域の中央をL字形に貫通したため、沿線の田畑は広い地域にわたって水の便にうるおった。内原地域は用水組合に加入せず、養蚕ブームにのって、畑は一面に桑が植えられ、ほとんどの農家が麦や米を買

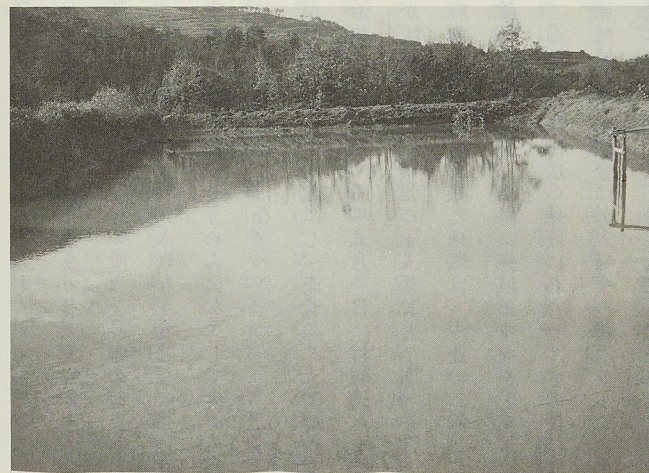


麻名用水南部幹線 (山路)

って食べた。

大正末期より昭和初期にかけて、山麓地帯に溜池が築造せられ、灌漑施設が進み水田化するようになった。国の施策の食糧増産と、戦後の食糧不足になやんだ結果、畑地にも動力灌漑施設が造られた。それによって昭和三十年代には水田面積は一六〇余町歩（一六〇余畝）に達し、裏作には裸麦と小麦が盛んに作られていた。

水田の田植は六月中、下旬の梅雨期に行われた。短期間の植付けであるので現小松島市、阿南市方面から、早ばやと植付けの終わった農家の主婦が、早乙女と言って田植のため菅笠、襷掛け姿で稼ぎに来ていたのが多く見られた。稲の刈取った田んぼで牛・馬を使って耕耘す

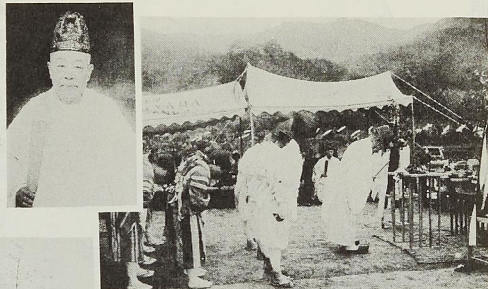


溜池（森藤壇）

る技術を競う競犁会も行われていた。

昭和三十年代に入り、食糧事情の安定と食生活の改善向上により、園芸作物や、畜産を取り入れた多角経営農業に移行して来た。しかし米作は主要農産物で、近時は機械化による栽培技術の改善と、農業薬剤による除草効果の偉力により労働力のかからない作物として、米余り現象の昨今であるが、農家にとっては大事な作物である。

毎年宮中において行われる、新嘗祭の御用穀献米者徳島県代表として昭和十五年には森藤の波部菊太郎氏が奉仕者となり、ことに戦争中のことで厳しゅうな神事で行政機関をはじめ県内来賓、森山村内有志、森山小学校児童生徒も参



奉仕者と齊田波部菊太郎氏



田植

四、果 樹



奉仕者後藤千一氏御夫妻と県知事

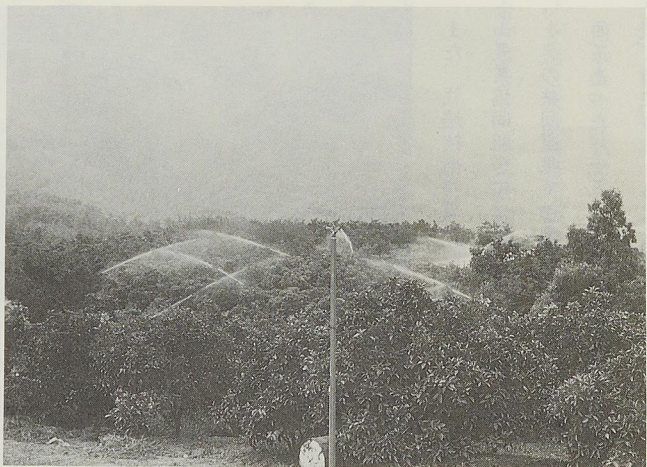
列して、播種式、田植式、刈穂式を行った。

戦後は昭和四十八年に山路の後藤千一氏が徳島県の農家代表として献穀者に指名され、田植式以来刈穂式まで日夜精魂を傾けて栽培に従事し、奉献の大任を果たされた。

山路の山麓地帯の一部で、古くから温州みかん、柿、栗の栽培を試みたが、栽培技術の幼稚さと販路の開拓が出来なかった。

はじめて数アールの温州みかんを植えたのは明治二十五年、時の村長藤井吉平氏であった。その

頃は不思議にも、今のようにな村一品運動が盛んであったので、おそらく村長として、村の特色を出すために、温州みかんの栽培を思いついたのであろう。明治中期だったから適切な肥培管理の技術も未熟であり、またみかんの需要も少なかつたから、好成績を上げることが出来なかった。あまりにも着想が早過ぎたのではなからうか。ただ技術的に感心するのは、その収穫したみかんを藍の寝床を利用して保存したことである。寝床は四季を通じて温度湿度の変化が少ないことを巧みに利用し、売り出す時期を選んだようである。換金作物としては成績が上がらず、廃園となった。その後は甘藷、大豆、小麦など穀類の生産農地に切りかえ、一部は桑園



ハ朝園の共同防除施設によるスプリングロー

となった。戦後しばらくして食糧事情の安定した状況を把握し、山麓傾斜地に、昭和三十四年から八朔の栽培をはじめ、鴨島町産業振興事業として取り組み、苗木の植付に補助金を助成し



柿の根



キウイ・フルーツ

また、栽培技術指導と販売市場も開拓した。森山農業協同組合には共同選果場を建設し、(麻)マの共同選果で初出荷したのは、昭和三十八年であった。十五キログラム一箱平均単価二千円で販売できた。

当時の換金作物としては最も優良な作物と推奨され、栽培意欲も非常に盛んになり、続いて麻植パイロット事業で開墾された傾斜地にも植付られ、昭和五十年代に入ると、植付面積も一〇〇町歩(一〇〇鈔)余に達した。販売出荷量も一〇〇〇トを越え京阪市場で販売され、売上金額も一億数千円を上げるに至った。八朔栽培農家も一三〇余戸となり、十二月初旬よりはじまる収穫期には採果作業には繁忙していた。

昭和六十年代に入る頃より外国輸入果実に圧迫され、また消費ものびなやみ販売価格も値下がり続けた。農家の生産意欲も減退し、現時点では成木の切り倒しが各所で見られる。他方ではキウイフルーツ、平核無柿などの栽培が起こり、時代の移り変わりと共に需要に応じた果樹栽培が行われている。

五、煙草

煙草は専売品であったため、換金作物として耕作希望者がはやくからあったが、耕作許可制度があるがために容易に許可が得られず、熱心に運動した結果、やっと昭和二十六年に耕作許可を得て

昭和二十七年より森山煙草耕作組合が発足した。耕作者四十二名、耕作面積十町歩（十畝）一反当り平均収量二〇〇キログラム、金額で四万円程度であった。価格は安定している上、耕作災害補償制度も確立しているため当時は他の作物に比べると、収益性の高い作物として注目され、専売局の生産指導に従い、規定通りに耕作や収納をしたものである。煙草は専売品であるため、配給制度中は監視員が耕作者宅を探查して、ヤミの横流し販売を厳しく取り締まった。



薪を使った煙草乾燥室の建物

昭和二十九年鴨島町合併により、森山四十名、牛島四十名、知恵島三十名、西尾二十名、鴨島十名、以上耕作者一四〇名が合併し、新しく鴨島煙草耕作組合として再発足した。以後二十年間は、生産奨励と価格も上昇して、安定した農作物として耕作者も生産に励んだ。

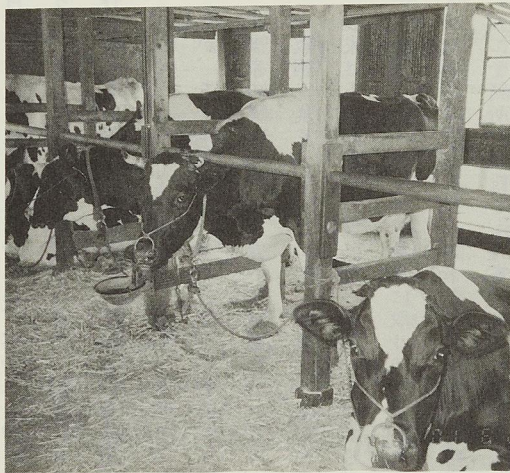
葉煙草の乾燥設備も、最初は薪の火力乾燥で

特殊な構造の建物の乾燥室であったが、灯油自動型乾燥と近代設備に改善されていった。

しかし、生産過剰と外国輸入がはじまったため、減産政策を打ち出して、農家は生産調整を強いられるようになり、その上病害の防除も困難となり、園芸作物に転換する耕作者も出て、昭和六十年を以って鴨島町から煙草耕作は姿を消した。

六、酪農

昭和のはじめより二〜三戸の農家が乳牛を飼育し、一般には珍しがつてしろ牛と言っていた。その当時は搾乳した生乳は、現在の鳴門市撫養港より淡路の乳業会社へ送っていたが、その後石井町高原に森永乳業が進出してきたため、森山村を含む近隣町村に乳牛の頭数が増加してきた。



畜舎内の乳牛

戦後に於ける食生活の変化で、有畜農業及び多角経営を農業施策に推奨せられ、昭和三十四年には西麻植に、明治乳業株式会社の集乳所が設置せられ、続いて加工場も新設されると、飼育乳牛も増加した。最盛期であった昭和五十年には、日産搾乳量八千㍉。乳牛頭数も一千頭を飼養するま

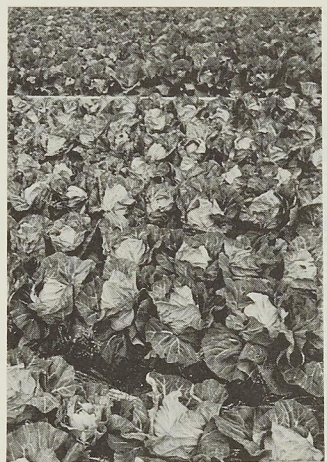


畜産競進会出場風景
提供=内原後藤田英明氏

でなっていた。酪農家も一四〇戸となっていたが、五十年半ばから消費の伸びなみや、兼業農家の後継者の他産業への就業などにより、少数飼育農家はなくなって、酪農業を主とする農家は多頭飼育の大型酪農へと移りつつある。時代にさきがけ有畜農業に取り組まれた内原の後藤田兵次郎氏は、昭和二十九年後藤田家畜人工受精所を開設し、種畜の改良と増殖に努められ、その功績により昭和三十六年十一月に黄綬褒章を受賞した。

七、蔬菜

戦前の換金作物としての蔬菜は、大根、牛蒡などを平担地の畑地で栽培し、一部は大根を沢庵漬に加工していた。戦後は山麓地帯で、白菜が優良品目として市場で名声を博したが、病虫害と連作障害により、次第に減退してきた。一般蔬菜は里芋、白瓜、高菜、キャベツと多種にわたって作付けされた。

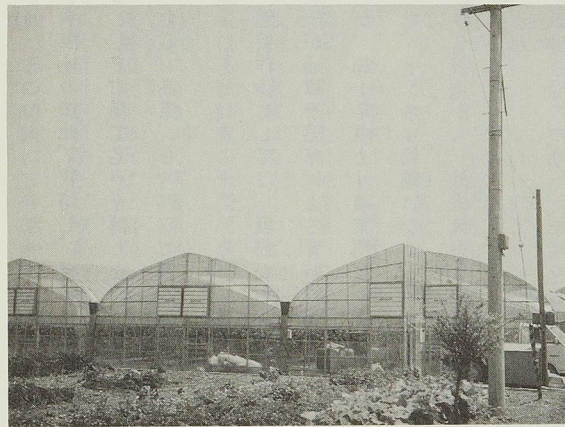


キャベツ畑 (中島)

園芸作物としては、戦前から少数の農家で、茄子が油障子温床による育苗栽培で作られていたが、三十年頃より農業用ビニールの出現によって、トンネル栽培になり、竹資材を使用したハウス栽培から、鉄骨大型加温栽培へと進んできた。阪神方面の市場へ、出荷を目的とした任意の

野菜出荷組合も三団体が組織され、それぞれの組合から出荷されていたが、時代の移り代わりにより、荷口の大型化や、品種の統一化の必要にせまられ、三団体は農協の販売に統一された。ビニールハウス栽培農家も五十戸を数えていたので、農業収入の主要生産物として注目されていたが、技術と労働力を要する作物のため、耕作者の高齢化と年間を通じた作業で専門的となり、栽培農家戸数が減少してきた。

野沢菜、ニンニク、とうもろこし、じゃがいもなど各種野菜のマルチ、トンネル栽培などは、今後は京阪神の生鮮野菜供給地帯として期待されている。地元鴨島町内の青果市場へも、多数の農家より多品目の野菜を出荷して、新鮮な野菜の供給が行われている。



大型ナス加温ハウス（内原）

八、苗木

苗木の生産は山路の田村正一氏により、山林苗木圃として、戦前に初めて山路地区に発足した。その後生産農家で、山林苗木生産組合が組織された。戦後は果樹苗木生産組合も設立された。森山は苗木生産には時代を先取りした生産地として、多量の苗木を県内外へ販売をしていた。経済成長が進むに従い庭園木、緑化樹の生産へも向けられ、徳島県をはじめ阿波、麻植両郡の町村助成補助による、緑化木センターが設立され、山路に展示園が設置されていたが、低成長の経済となった昨今は、購買力も停滞きみとなり、市場に合わせた生産となっている。



庭園木と山林苗の養成

九、さとうきび

大正から昭和にかけては、農家の子供の秋から冬のオヤツとして、自家使用分を栽培していた。板野郡阿波郡地方では製糖業者があり、広い面積の作付けがあったが、当地方でも戦後の砂糖不足による供給源として栽培された。

白下糖の製糖工場が、昭和二十三年に森藤の田中集落で数名の共同事業で発足し、後に藤井利一氏が継承した。中島の中塚では三好保一氏と、二つの製糖業者が十年余り操業を続けた。三好製糖は委託加工を主としていたが、藤井製糖は最盛期はさとうきび九万貫（約三四〇ト）を搾っていた。操業日数も三カ月に及んでいた。搾汁は大きい釜で粗炊、中炊、主炊の順で薪で炊き詰めていた。炊き方には技術を要し、炊子を香川県より雇い入れていた。さとうきびの買入れは森山村内はもとより、鴨島町内、川島町、石井町、市場町の範囲から行われていた。白下糖の製品は販売業者によって北陸、東北方面まで販売していたが、輸入砂糖に抑えられるようになり、昭和三十七年に操業を終えた。

十、森山農業協同組合

戦前は森山信用購買販売利用組合という名称で発足し、一般には産業組合と呼ばれていた。家庭の生活物資、農家に必要な肥料、農薬、農機具などの共同購入や、生産物の販売及び貯金の預り信用事業を行っていた。設置場所は現在の鴨島農協森山支所の西斜向かいで、道路の北側の個人家屋を借りて事業経営を行っていた。共存共栄を合言葉として、村内住民の組合員参加で自主運営を行っていたが、戦争に突入してからは物資の統制や配給制度となり、生産物は割当て供出となり、森山村農会の勸業技術指導



鴨島農協森山支所

と、産業組合の信用経済事業部門とが合併して、森山村農業会を設立した。食糧管理法による米麦をはじめ穀類、甘藷、野菜等農業生産物の統制販売、資材の供給の他、軍需品の燃料として松の根で松根油の製造など、国の要請に従って事業を行った。

戦後は占領軍の指令により農業会は強制に解散となり、新しく昭和二十二年、農業協同組合法による農家を主体とした、森山農業協同組合の設立となった。

鴨島町合併前の旧町村で設立運営をしていた鴨島、西尾、牛島、牛島村、知恵島の五農業協同組合が昭和四十四年に合併し、新しい鴨島農業協同組合が設立された。その後森山農業協同組合は、昭和五十七年、鴨島農業協同組合に吸収合併し、森山支所として現在に至っている。

第二節 商 業

商家や町人の住宅が建ち並んでいた中島の中塚は、伊予街道の改修が明治の中頃より大正にかけて行われ、吉野川平野南岸の重要な道路で、物資の交流や人々の交通にも便利な沿線であった。

明治三十二年、徳島から鴨島まで鉄道が開通されてからは、鴨島を中心とする商店と、製糸工場の操業による人口の増加で、交通量も増してきた。

鴨島の商店街に隣接する中塚は小売商人の町として軒を並べた。米麦穀類をはじめとする食料品、呉服、荒物菓子、宿屋、飲食、料理店、自転車、風呂屋、家具、農具鍛冶屋など森山の商業地域として活気ある町並であったが、戦争中の物資の不足と統制経済による整備と戦後の新設道路事情などによる交通網の変更から商店街の形状がかわってきた。かつてのはなやかな面影は無くなってきた。

現在の森山地区の農村地帯には、肥料商と数軒の荒物、菓子、酒、食料品店、豆腐製造販売店が

第三節 鉦・工業

一、瓦

一 森向「六」の刻印瓦

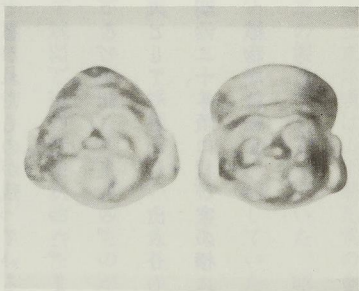
森藤向原の桑原義男氏方は、江戸時代から続いた瓦屋であった。創業年代はつまびらかでないが、古くから「森向「六」

の刻印で知られ、製品は麻植郡内は勿論、阿波、名西、板野各郡の村々まで、荷付馬の背で運ばれて行った。

江戸時代から明治にかけては、屋敷内に千二百枚焼きの大窯を築いて焼いていたが、明治末期からは六百枚焼きの小窯に築きかえ、昭和二十二年まで製造していた。屋敷内には、粘土を掘り出した跡を池や掘にして水を溜め、防火用水のほか道具類や型枠を洗ったり、ねり土の水に使



「六」の鬼瓦



「六」が製作した瓦のえびす大黒
(大正六年作)



中塚商店街で大正天皇御大典奉祝踊 大正3年
(写真 中塚大塚真一氏提供)



中島の国道商店街

あり、近隣の顧客で営業を行っているが、商店街といった地域はなく、それぞれの地域に点在している。
近時は国道一九二号線の内原、中島の地域には大手スーパー、チェーン店などが立ち並んで営業されるようになってきた。

っていた。

同家は瓦の製造を代々受けつぎ、大窯で焼いていた頃は、専属の荷付馬が十頭ほども出入りしていた。大正から昭和にかけての馬は七頭ほどで、同家に入りにしている専属の馬方衆に一頭ずつ預けて、粘土やたき木、瓦の運搬に使った。大正以降は名西山分の村々からの注文が多く、馬の背に五十〜六十枚の瓦を乗せて梨の木峠や持部峠、折木峠を越えて運んだ。帰途は窯の燃料の割り木や、かますにつめた松葉を買って馬の背に乗せて帰ったという。

明治十年頃の記帳に、駄賃一日七錢（一錢は一円の百分の一）と書かれたものが残っている。これは同家に入りの馬方衆の日当のようで、当時の米は一升（一・八石）が四錢位だった。またいつの時代かは不明だが、瓦一枚一錢二厘（一厘は一錢の十分の一）などが記されている。

また、寺谷の田村敬雄氏方では、曾祖父が向原の桑原家の瓦職人としてやどわれ、出入りしていた。かねてから自宅附近の地中にも瓦に適した粘土があるので、明治二十年頃に我が家の横に窯を築いて製造した。しかし粘土質が最良でなく、数年間焼いて中止、織物商に転じた。

2 瓦関連業者

阿波スレートの創業者は淡路出身の故人田村嘉次郎氏である。大正末年頃は山下製瓦業の番頭をしていたが、昭和の初期に自宅を開業した。後三代に亘って日本瓦の製造業を営んでいた。昭和二十年代後半の最盛期には従業員五十人を数え、製品は県内をはじめ、京阪神へも出荷していた。

しかし、戦後の混乱もようやく落ち着き、建築ブームと言われた昭和三十年代には日本瓦の人氣が下火になり、代ってスレート屋根に人氣が集まった。これまで原料として採掘していた寺谷の粘土は小石まじりの上、亜炭をはさんでいたため焼くとはじけたり穴があいたりして良質のものが得にくかった。また、ダルマ窯で松材を燃料としていた為、五枚重ねで焼くと上の部分が曲ったり割れたりしてうまく焼けず二等品が多く出ることがあった。そこで日本瓦に見切りをつけ、スレート瓦の製造に切り替えた。

それ以後二十三年、四年間続けていたが、諸般の事情からスレート瓦の製造も中止し、注文に応じて他の製造業者から取り寄せ販売のみを行って現在に至っている。

国道一九二号線沿いの内原で、家具販売業も併せて行っている。

他に瓦に関連した生業を営んでいる家が四戸（何れも山路）ある。山下芳春氏・大石常太郎氏・山下智氏・藤川芳男氏、各家である。そのうち現在瓦製造を行っているのは山下製瓦工業（山下芳

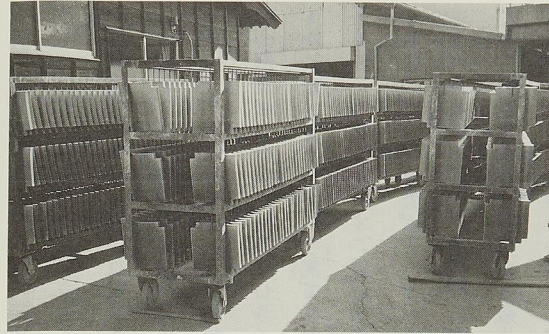
春氏）のみで、他は製造は行っていない。

山下製瓦工業（有）では、かつては寺谷の粘土を用いて製造していたが、原料が粗悪の為、今では原料である土は兵庫県の淡路から取り寄せて造っている。

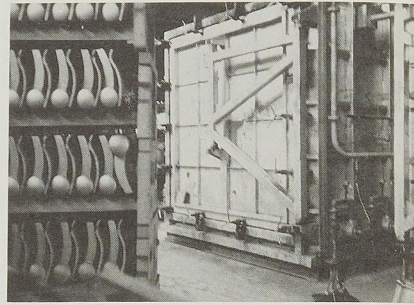
他の三軒の瓦業者もかつては製造が主であったが、昭和五十年代になって製造をやめ現在では注文に応じて製造元から製品を取り寄せて販売している。

しかし、どの業者も瓦製造には古い歴史を持ち、大正・昭和初期の創業（藤川家は昭和二十二年創業）と伝えられている。

第二次大戦中は一時中止していたが、戦後再び操業を始め、需要の延びと共に生産量も飛躍的に増大していった。最盛期



瓦乾燥風景（山下氏宅にて）



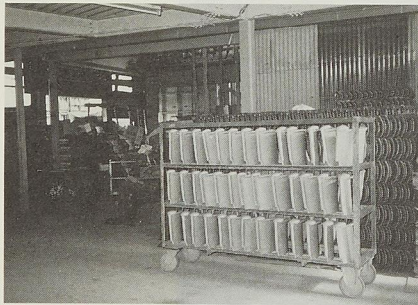
瓦焼成用ガス窯とその製品
（山下氏宅にて）

には従業員も総数では二百人にも達し、昭和二十六年には山路と上浦の生産量を合わせると実に二十七万枚を生産していた。販売先はほとんど県内であったが、一部は県外へも売り出されていた。

山下家では現在新式のガス窯を二基据えて、大量に生産している。土窯に比べて人手も少なくて済み、一度に千枚の瓦が焼成され、しかも粗悪品がなく従って

生産コストが安くて済み、それだけ利潤が多く見込める訳である。

その他に山路常玄の木村義次氏が、昭和二十三年から昭和三十年頃まで瓦製造を行っていたが廃業した。



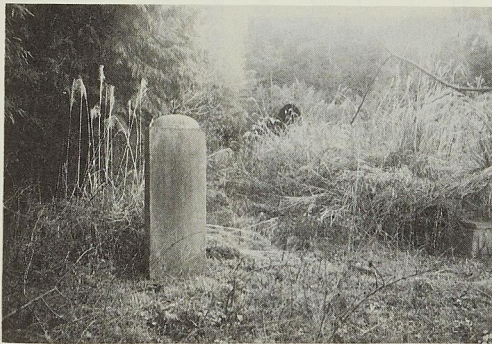
瓦製造所の作業場（山下氏宅にて）
（山路東原）

二、製粉と製麵

1、製粉

製粉業を営んでいる家は三谷奥に集中していた。動力源を水に求めていたためであろう。明治初年からの歴史があり、三谷川の流れをせき止め、その水を水路で川下に導き、水車を回し、大きい石臼を回転させて穀類を粉にしていた。

明治の初めには既に操業をしていた。今では操業はおろか各家とも他地域へ引越し、製粉をしていた処は、荒れるにまかせている所あり、植林された所ありで、隆盛時のようすを偲ぶことは難しくなっているが、水路と思われる石積み溝や、作業場跡と思われる屋敷等で、往時のようすをわずかな



水車による製粉所跡 (森藤三谷)

がら伺うことができる。

当時は交通機関の発達も充分でなく、原料、製品の運搬は、ほとんど馬力、人力に頼っていたようである。

穀類が粉にされたあと、桶や袋づめにして、上から龍王神社付近まで馬力で運び、そこからは二人曳きの荷車で各地へと運ばれていた。遠くは人力で徳島までも運搬していたようである。

なお、注文による賃挽きも行っていた。また機械による製麵をどの業者も行っていた。

三谷奥の製粉業者は次の各家であった。

波部 茂平氏 (称号) ヤマシヨウ

大久保 秀三郎氏 ヲ ヤマヒ

藤井 半平氏 ヲ マルハ

藤井熊二郎氏 ヲ カネイワ



水車を廻すための水路の跡 (三谷川)

2、製 麵

A 手延べ素麵

東森藤の元村政一氏家では、明治三十九年頃から手延べ素麵の製造を始め、昭和二十三年まで、約四十余年間続いた。

一日の生産量は二十貫（七五キ）と言われていた。その作業は極めてきびしいものだったと思われる。しかも、それは家族だけで働いての生産量である。

小麦一斗（一八石、十五キ程）を注文者から預り、それに対し一貫九百匁（七、一二五キ）の素麵を渡し、後に小麦を精算するという仕組みで、いわば、製麵代は注文者に渡した麵の残りの品物で生計をたてていたという次第である。

商標「 \times カネイズツ」として、近郷にその名が知られていた。

他に手延べそうめんを造っていた家は、東森藤松尾彦六氏（当主文明氏）があったが、現在は造

っていない。

また他に小規模な製造家が幾軒があったようであるが、何れも期間が短く、生産高も少なかったためか、記録も乏しく、不明な点も多い。

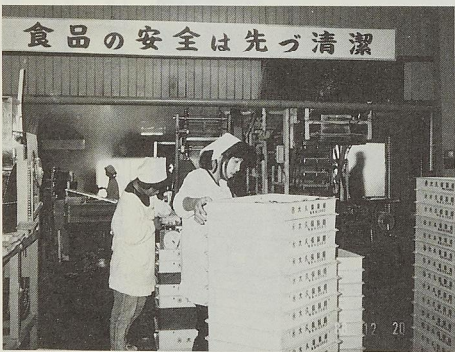
中島西部の宮本武敏氏宅（屋号↓そうめん屋）では、製造を行っていたが、今は廃業している。

B うどん製造

現在麵類製造を活発に行っている事業所に春日免の大久保製麵所がある。

昭和二十四年、自宅で製粉をし、それで素麵を造る仕事で事業を始めた。

昭和二十八年からはうどん製造を併せて行い今日に至っている。今ではうどんが中心であり、麵類全生産量の大半はゆでめんであるが、夏場（六、七、八月）になると素麵



うどん製造（大久保製麵所にて）

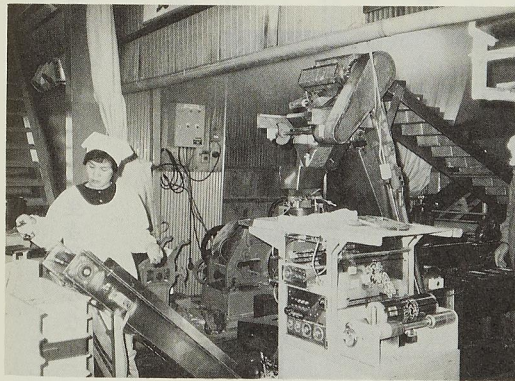
の製造も行っている。

自動製造機械を使つての作業であるが、従業員は十名を擁し、月に十万袋のゆでめん（なまうどん）を造っている。その製品は地元の小売業者への卸、更には徳島市、鳴門市の食品小売業者などへ卸している。

素麺は乾燥麺であり、県内のみならず、県外からも注文がひきもきらずあり、宅急便の利用で各地へ送り出している。また、自宅販売も行っている。

なお、川島町の国道一九二号線沿いに、一休さんという食堂を構え経営をしているなど、活気のある事業を行っている。

また中島の三好製麺は、先代からそうめんを製造していたが、昭和四十年代から節麺せちめんに切り替え、現在は家族だけで注文に応じて作っている。節麺とは曲つた短麺で、棒に巻きつけて作る珍しい干麺かめんである。



製麺風景（大久保製麺所にて）

三、温石

温石は、白く少し青味をおびたやわらかな石で、結晶片岩けつしょうばんがん中の滑石片岩かすせきと呼ばれるものである。

昔は、冬季に温石を火であぶり、温まつた石を布（綿）などで包み、腹に当て、体を温めていた。また、漢方医が、病人に温熱療法として用いたとも言われている。

これらは明治から大正にかけて普及された懐炉かいろ（ふどころに入れて体を温めるもの）に押され、次第に姿を消し、現在では全くと言っていいほど使われなくなっている。

さて、森山での温石採掘であるが、古い文献などには掘り出されたという記録は見当たらないが、古老の話によると、明治二十年頃から、七・八年間、森藤の壇集落上方の、同所渡部氏所有の山林石口で採掘されていた。今では草木が生い茂り、その跡は明らかでない。産出量などは不明であるが、当時はまだ鉄道が開通していなかったため、重い貨物はすべて江川から船で徳島へ運んでいたため、船着場まで馬の背に積んで、一日三往復ぐらい運んでいたという。

採掘には、備前（現在の岡山県）から来た一人の男性が指導していたと伝えられ、地元の労働者

が四〜五人で採掘作業に従事していた。

その頃は、地域の人々もよく温石を拾って焼き石にし、懐炉の代用品として使っていた。また、子どもたちも、温石を拾い、遊びや学習の用具として使用していた。いわゆるギンコ石である。

四、亜炭

亜炭は石炭の仲間で、褐炭とも呼ばれている。これらの中では最も炭素分が少なく、従って発熱の量（火力）も、最も少ないと言われるものである。

森山では、中位段丘礫層という層の下に粘土の層が約六十センチの厚さで埋蔵されている。その中に数枚の亜炭層がある。終戦前後（昭和二十年頃）の数年間、燃料がとても不足していた時期に、寺谷付近で抗道を掘って、これを採掘する炭鉱会社（通称徳炭）があり、採掘された亜炭は馬車十数台で一日四往復、鴨島駅、筒井製糸、蚕検定所などへ運んでいた。また通産省による埋蔵量調査等も行われたが、昭和二十年末ごろに採掘が絶えた。現在では抗口も埋めてしまい、場所もわかりにくくなってきている。

この亜炭からは、メタセコイヤ、ヒシの実などの化石が見つかっている。

同時代の亜炭鉱は伊賀上野や、名張にもあった。その地では元禄時代（一六八八〜一七〇三）、すでに木炭の代わりとして、燃料に使っていたらしい。森山地域でも掘り出され、散乱していた亜炭片を拾い集め、家庭に持ち帰り乾燥し、風呂の燃料としていた家もあった。

なお森山の粘土層には、亜炭層の上に凝灰岩（みがき砂）が一枚あり、また、哺乳動物や爬虫類の遺体の破片が多く見つかっているところから、この付近は湖沼の時代があって、植物の遺体だけでなく、動物の墓場であったとも言えるのである。

同所の亜炭埋蔵量は、百五十万トと推定されている。

六、持部・広石鉷山と森山の関係

― 阿波の銅山

明治十年代から大正にかけて、現金を得るための働く場所があまりなかった中で、名西郡阿野村字持部（現在の神山町）の持部鉷山は、森藤の通称「前山」を越えた位置にあって、その採掘や運搬に、森山村の人々が大勢働いて、大切な現金の収入源となっていた。

高越山系や、雲早山系に埋蔵されている鉷脈は、主として硫化鉄、いわゆる黄鉄鉷や黄銅鉷で、数徳年の昔に、太平洋プレートに乗って運ばれてきたものと言われている。これらの鉷脈を埋蔵する山腹からは、赤い鉄さびが流れ出るため、早くから所在が知られており、江戸期よりも以前から露出している鉷石を、土地の者が露天掘りをしていたとも言われている。天正十三年（一五八五）に入国した蜂須賀氏は、江戸初期からこの鉷脈に目をつけ、領内の鉄の生産をめざして、藩の直営事業として開発にのり出した。藩政時代には阿波国内にある鉷山は、土地の名称で呼ばず、太郎・

次郎・三郎と呼び、以下五郎まで五カ所の大きな銅山があった。

太郎銅山と呼ばれた高越山系の麻植郡東山村（現在の美郷村東山）上谷の開発は、宝永二年（一七〇五）となっており、文献の上では次郎・三郎より後年になっているが、実際にはずっと以前から、他の鉷山よりも早くから掘られていたようであり、また元禄二年（一六八九）に藩主が開抗したと書かれたものもある。

次郎銅山は、延宝年中（一六七三―一六八一）の創業で、名西郡神領村（現在の神山町）にあって、剣山脈の雲早山系を鉷脈としている。三郎銅山は貞享二年（一六八五）の創業で、高越山系の麻植郡中村山村野々脇（現在の美馬郡木屋平村）にあった。

四郎銅山は那賀郡百合村（現在の那賀郡鷲敷町）にあり、五郎銅山は高越山系の名西郡広野村の（現在の神山町）持部であった。当時は鉷山とは呼ばず、銅山と書いて一般には「かなやま」と呼んでいた。

藩では直営とは言っても、藩が採掘するのではなく、大商人の資本に頼って掘らせていた。そのため大坂や紀伊（和歌山）、大和（奈良）、阿波のかなやま業者らが、代わるがわる資金や技術を持ち込んで掘ったらしく、次郎銅山について、天保二年（一八三一）に岸粟里が書いた『大粟誌稿』に

次のような記述がある。『次郎銅山、延宝年中大坂奈良屋吉兵衛・備前屋次郎右衛門草分け掘り初め、其の後大坂くさきや徳兵衛・岡本勘七掘り、又其後、小松島浦寺沢六右衛門掘り、此時銅山繁昌。又其後、熊野国（紀伊国のことか）太郎右衛門頭領に而。元締は御国（阿波のこと）者加わり掘、元禄中上野一件まで年数二十年ばかり、代わるがわる掘り、それより止まる。

夫より正徳中、大和国善六一両年掘、また大坂雑賀屋七兵衛元締に而、手代次右衛門四、五年掘り、享保中止む。

又寛保三亥年（一七四三）より延享二丑（一七四五）冬まで三ヶ年南八蔵掘。以下略』（神領村誌）より。

他国の金山や銀山は別として、阿波の鉷山は鉄や銅鉷で、鉷脈も細いためか、または運び出しに経費がかかりすぎたためか、昔から、かなやまでもうけた者がない、と言われるほど鉷石掘りは採算があわず、大ていが赤字を出し、倒産した例は多い。藩では米を送り込んで援助をしていたが、次郎銅山の場合も、一年から四年で元締が代わっているということは、何れももうからなかった証拠で、他の銅山も採掘と中止をくり返している所を見ると、同じような結果であったといえる。

持部五郎銅山は、いつ頃から掘り始めたのか記録が見当たらないが、藩政期で五番目の創業となる

と、江戸中期以降であろう。この銅山も休山と再掘をくり返しているようで、明治の初めは休山していた。しかし、江戸期に断絶的に掘り出されたということは、森藤村や、山路村の人々が、人足として働いていた可能性は考えられる。

明治三、四年頃に休山していた東山の太郎銅山が採掘を始め、十六年には持部も再掘し始めたが、一年余りでまた中止した。

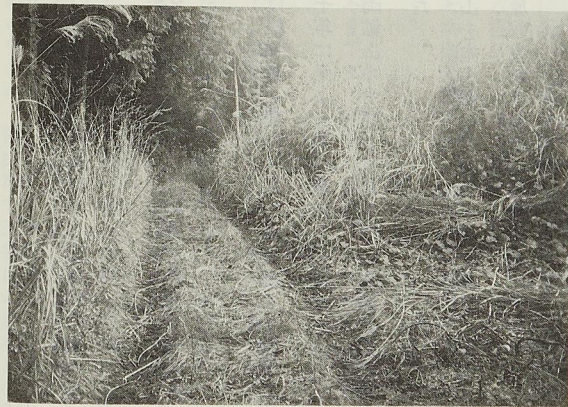
明治三十五年に、持部鉷を再び掘り始めたが、数年間は経営者が変わりながらも何とか操業は続いていた。やがて資本家島徳蔵が三十九年に持部を、四十年に東山を共に買収し、両鉷を合併して持部・東山鉷山と改称し、本格的な採掘を開始したが、両鉷山の中間に位置している名西郡阿野村（現在の神山町）広石ではまだ鉷山は開発していなかった。

四十三年十一月に、久原房之助と共同経営になり、東山を本山鉷山、持部を持部鉷山と別々に呼んでいたが、大正二年八月に、両鉷山は日本鉷業系の久原鉷業株式会社の経営に移った。

2 鉷石の運送

明治三十五年の持部鉦山再開は、森山村の人々にとって、大きな就業の場となった。明治三十二年二月十六日に徳島と鴨島間に鉄道が開通したのを利用して、日本鉦業は持部の鉦石を鴨島駅へ運び出す計画をたてた。鉦山は山向うの名西郡広野村にあるため、掘り出した鉦石は、担いで持部峠（名西・麻植の郡境）まで運び上げ、峠からは森山村大字森藤字三谷の八大竜王神社の南へ降ろすため、へアピンカーブのついた延長約四キロのギチぐるま専用道路を開削した。

ギチ車は約して「ギチ」と呼び、大八車を小型化したもので、荷台の両側にムクの木丸太を輪切りにした直径約三十センチの木製の車をとりつけたものである。これを一人で引くのであるが、引き綱を肩にかけ、かじ棒を持って荷物を運ぶ。この車は坂道をくだる専用車で、もともと薪や木材を山から運び出す



鉦石が運ばれた道(奥三谷)

す目的で、明治になってから発明されたものである。

荷物を運び終えた車を、また山の上へ移動するには、人が肩に担いで運び上げる。車の重量は、荷綱や弁当を含めると五〇キロを越えるため、空車を運ぶのは荷物をのせて運ぶ時よりも、はるかに重労働であった。ちなみにギチ引きは早朝に家を出て、自分が運ぶだけの荷を坑口から峠まで運び上げる。力の強い者は多く担ぐことができるので賃金も多くもらえた。

鉦石は一袋に十貫（三七、五キロ）を入れて一駄としてあり、これを持部峠まで、一人で一度に二袋を担ぎ上げていた。ギチには三袋（一一三キロ）を積んで山をくだるのであるが、ギチにはブレーキ装置がなく、坂道を暴走しようとするギチを、足で踏んばって制止しながらくだるのは、経験と技術、力量を必要とし、生命の危険をかけた重労働であった。

ギチ道は、雨降りでも作業が続けられるように四キロ全てを屋根で覆ってあった。このような屋根つき道を韜道たうだうという。

竜王神社の南へ集積された鉦石は、更に牛車に積んで鴨島駅まで運んだ。このため、森藤の三谷から、飯尾の高ノ原、番辻を経て鴨島まで約四キロの在所道は、牛車が対向できるよう幅員を約三倍以上に拡張され、搬出の中継所である三谷の道沿いには、酒屋やうどん屋が出来て人足達で賑った。

なおギチ引き人夫の賃金は、その日払いで壇の渡部茂平が日本鉱業の経理代行者となり、人夫達が運んできた鉱石の重量を秤ってその場で支払っていた。

鴨島駅では貨車に積み込んで小松島港まで送り、船に積みかえて愛媛県の四坂島や佐賀県佐賀関へ運んだ。

トンネルを掘り進みながら掘り出した重い鉱石を、船に積み込むまで、このようなルートをたどるため、運賃に多額の金がかかり、その分だけ沿線では働く場があり、金が落ちたというわけで、好景気をもたらした。

大正二年以降に久原鉱業は、東山と持部の中間に位置する広石鉱山も開発して業績はのび、広石と持部は鉱山景気が到来して、昭和二十年頃まで盛んに掘り出されていた。

広石の鉱石は、はじめは梨ノ木峠まで馬や人の背で運び上げ、峠からはギチに積んで飯尾高ノ原の登り口地藏橋までおろしていたが、大正七年にワイヤーロープによる索道で空中輸送をするようになった。しかし間もなく広石では索道を変更して、川島駅へ直結したため、高ノ原ルートは廃止となった。

一方持部鉱山も大正になるとワイヤーロープによる索道を架設して、空中輸送に切り替えた。こ

れまでは、人や馬の背で担いで持部峠まで運び上げていたのを、坑道口からゴンドラに鉱石を入れて峠へ登り、峠からいっきに三谷までワイヤーを伝ってくだってきた。このゴンドラを動かすケーブル線の原動力は、三谷川に架設した巨大な水車によって動かしていた。

これでギチ引きの仕事はなくなり、ギチの専用道路は廃道となった。ワイヤーの輸送力は驚異的で、ギチ輸送をはるかに上回っているため、鉱石の生産も大幅にのびた。

このため、三谷の集積場から鴨島駅まで、牛車の輸送では間に合わず、馬車が登場してスピードアップされ、牛車は姿を消した。馬車引きの人達は、三谷を中心に森藤には大勢いて参加していた。持部鉱山の森山村ルートの搬出は、大正十二年頃まで続いていたが、その頃から持部と広石間に索道を新設して、広石の索道と結び、持部も川島駅へ運び出すようになった。明治三十五年以來、二十年に及ぶ鉱石輸送の仕事は、森山から完全に姿を消した。

しかし鉱山景気はその後も続き、昭和二十年頃まで森藤あたりから広石へ鉱山労務者として多くの人を通して働いていた。戦後、広石と持部では閉山に近い状態となり、それぞれ十人前後で残鉱掘りを行っていたが、昭和三十年頃に操業を停止した。

七、味 噌

味噌は次のような歴史をもっている。

中国では論語に鼓こと言って、大豆を醸造食としたとある。日本へは奈良時代に渡来した。その当時は密祖みつそと呼ばれ、後に未醬みそうとなり、味噌となった。庶民に普及したのは室町時代からであると言われている。それまでの味噌は大豆を主体として、麴こは全く使っていない。その後各家庭で麦や米の麴こを混入して、いわゆる「手前味噌」を造り自慢するようになり、今日の速成味噌として普及するようになった。

ねさしは大豆を蒸し、これに塩を混ぜ発酵はちようさせたもので、麴こは一切使用しない。今の速醸法ではアミノ酸の分解が充分行われていないから「こく」がないが、ねさしは発酵熟成はちようじよくせいに一年以上も置くから塩辛さがなく、ふくよかな風味があり香りがよい。しかし、醸成期間が長く、資本をねかすという欠点がある。

徳島の桂味噌商は慶応、明治の両時代にわたって、ねさし味噌の名だたる老舗らひほであった。神社・仏閣の玉垣に寄附者の名前に、桂八十八の文字が多く刻まれている事実を見ても、如何に桂家が旺

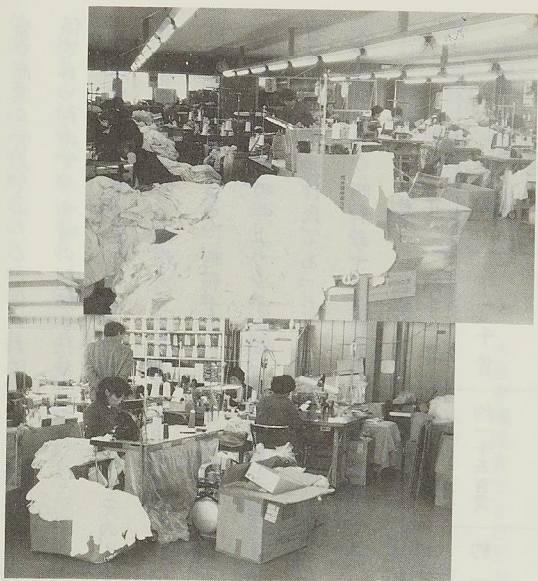
盛な商業を営んでいたかが伺われる。森藤の屋やの屋号で知られた藤井甚三郎は、桂家とは姻戚関係であったので、味噌の製法を伝授された。

□屋はねさし味噌を主に造り、桂商店の味をそのまま伝えたので好評であった。原料は地場で産出する大豆と共に、満州大豆も多量に使用していた。□屋では小売業への卸、家での小売をしていたが、後継者がなく、昭和十年ごろに中止となった。

他に中島中部の井上カツ子氏宅ではねさし味噌の製造販売をしていた。創業は昭和十三年で創始者は先代井上惣作氏であった。三年間ねさして造る本造りのため、人手、場所、機械、道具等でコスト高となり、昭和五十五年止むなく操業を停止した。(左表は井上家の味噌生産高変遷である)

生産年	生産高 (尺貫法)	生産年	生産高 (メートル法)
昭十三年	約一千貫	昭十九年頃	三七五〇 <small>キログラム</small>
昭十五年	約一千五百貫	昭二十五年頃	一一二五 <small>キログラム</small>
昭十九年頃	約一千貫	昭三十～四十年	一八七五 <small>キログラム</small>

八、縫製工場



縫製工場風景

昭和三十年代後半から、昭和四十年代の日本は、世界の人が目を見るほどの経済成長を上げた時代であった。企業はどんどん設備投資をし、事業を拡張していった。地方にも大企業の下請け、孫うけ、ひ孫うけ工場というように工場がたくさん生まれた。森山地区でも、次の欄のような縫製工場がこの頃に操業を始め、今日に至っている。

(昭和六十二年調査による)

森山の縫製工場一覧

工場名	所在地	創業年	従業員		生産物作業内容	その他
			男	女		
後藤田被服	中島	45・5・5	3	23	26	ジーンズ製造 縫製加工
生和被服	山路六五四	42・1・16	16	109	125	紳士スラック 縫製加工
スターニット	森藤宮前	昭46・1		33	33	婦人ブラウス ミシン加工が 中心
						年産四万四〇〇〇着程度を 生産している デパートへ販売している。
						月産二万二〇〇〇本 京阪神方面へ出荷している (貸加工が主である)
						月産五〇〇〇〜一〇〇〇〇 メーカーの注文により加工 する。

し、最盛期には女子工員約三十人が働いていたが、昭和十二年頃に操業を停止した。
その他に、森藤の大久保純逸氏が終戦前後に、田中で製糸工場を経営したが二年程で中止した。

十、食品加工業及び製材業

1、豆腐製造

現在営業している地区内のごうふ製造業者は、次の通りである。

山路 松尾正夫氏

内原 村本愿夫氏

森藤 三谷己義氏

中島 久富食品工業株式会社

2、こんにやく製造（現在は廃業している）

中島西部 井上チト氏

中島西部 小杉節太郎氏

春日免 川端武夫氏 他数軒

3、漬物

森藤壇 大西 実氏

東森藤 石田 明氏

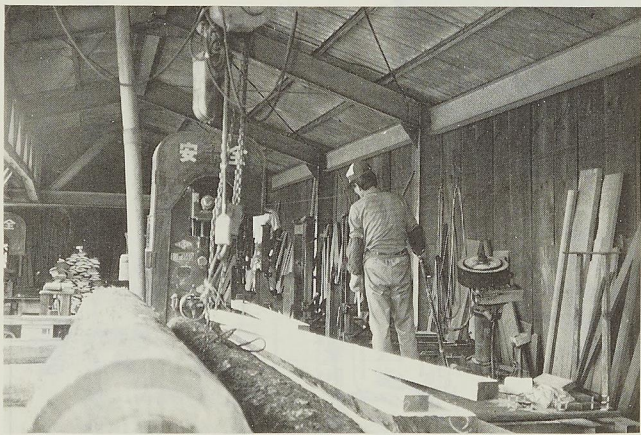
4、製材

中島 野木製材

戦後、森藤の春日免で十年ほど操業していたが、その後、中島の県道沿いに移転して続いていた。昭和五十九年頃に製材を中止し、これまで製材と合わせて操業して来た縫製工場に改造した。

中島中塚 酒巻製材

戦前、戦後を通じて操業していたが、昭和五十年頃に中止した。



製材所の内部

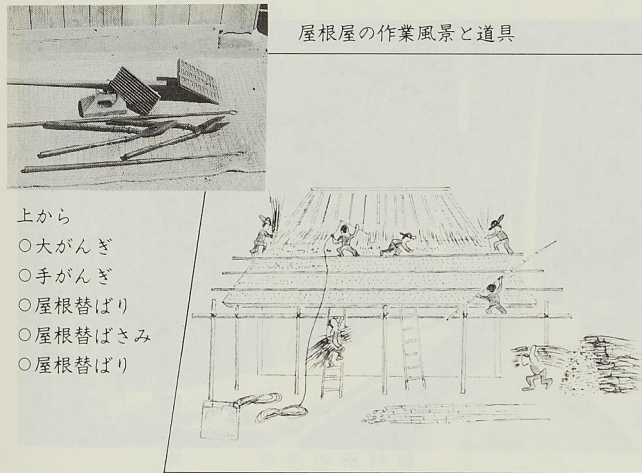
第四節 昔の職業

過去の時代に生業として成り立ち、社会的にも有意義な仕事だったが、時代の移り変りとともにその存在の意味を失った仕事として、森山の人たちが携わっていた職業には次のようなものがあった。

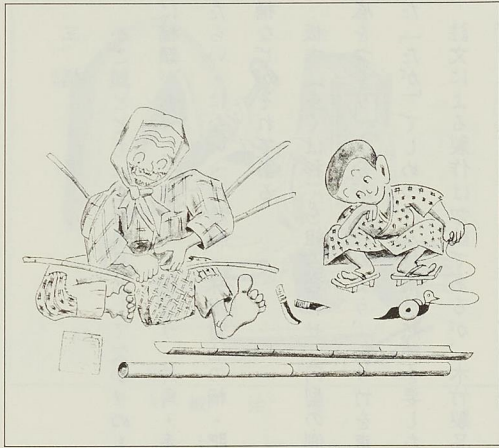
一、屋根屋

戦前の家屋は殆んどワラ葺の屋根であった。現在も一部残っているが、その殆んどはトタン板で巻かれている。材料が、カヤ・小麦ガラであったため、雨風によって朽廃するので、何年か毎に「屋根がえ」と言って葺き替えが必要であった。新

屋根屋の作業風景と道具



- 上から
- 大がんぎ
 - 手がんぎ
 - 屋根替ばり
 - 屋根替ばさみ
 - 屋根替ばり



かご屋

築の時は勿論、屋根がえの際、専門の職人として雇われたのが屋根屋である。屋根屋の人たちは、通し針・大がんぎ・屋根屋ばさみ・小鎌などの道具を持って、設計図なしの特殊な技術で、正確に葺き上げていった。

二、かご屋

戦後ビニールやプラスチック等の製品が出廻るまで、いかき・ざる等の台所用品、大箕・小箕通し・目かご・桑摘みかごなどの農作業用具は殆んど竹製品であった。

その製作には、竹割りから始まって、かなりの熟練と技術が必要であった。

かご屋は或は詳文により、或は行商のため、或は農具市などを目ざして、前記のような竹製品をつくり販売していたわけである。

三、桶屋

かご類とともに生活用具として欠かせぬものに桶類があった。飯びつ・半ぼう・片角かたの・手桶かたの・たらい・にない・漬物桶・味噌醤油の桶・肥汲こま桶などがそれである。

板木（多くは杉）を組み合わせ、円形の側・底をつくり、水分が漏れぬよう、割り竹を束ねた「たが」でしめつける技術は熟練を要した。註文による製作は勿論であるが、木竹製品なので耐用年数が短かく、戸別に廻って修理する仕事が多かった。



桶屋

四、鍛冶屋



鍛冶屋

鉄を鍛えて道具をつくる仕事として、鉄砲鍛冶・刀鍛冶・鋸鍛冶・野鍛冶などの鍛冶屋があったが、この地域にあたったのは野鍛冶である。

主として唐鍛・カナ・鎌・草切り・なぎたなどの生産や修理を業とした。

「鉄は熱いうちに打て」と言われるように、真赤に焼いて軟かくなった鉄を、キラキラとまばゆい火花を散らしながら、思い通りの形や厚さに打ち鍛える風景は、小学唱歌「村のかじや」に歌われている通りだった。

鉄を焼く燃料には松炭、戦後はコークスが使われこれに手押しのおいでで空気を送り、火力を強くして焼いていた。

五、蹄鉄屋

薪や木炭など山地からの物材の運搬、平地での馬車による物資の輸送など、現在のトラック輸送に変わるまで、馬はその主役を担っていた。馬車輸送を業とする人は勿論、農家でも多く耕作用として馬を飼っていた。

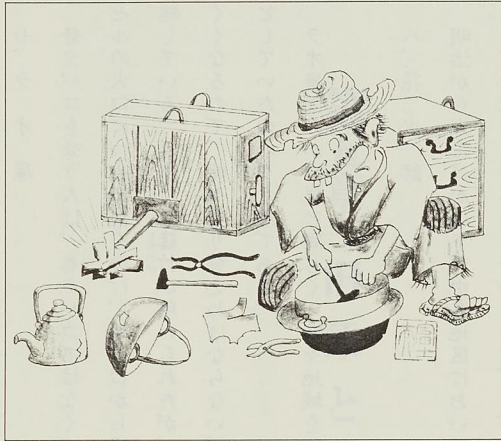
馬には蹄があるが、悪路重荷や作業のため蹄は傷み易い。それを保護するため、蹄の形に合わせて鉄具をはかせていた。それが蹄鉄であり、それを鍛冶屋と同じ手口でつくり、特殊な釘で蹄に打ちつける仕事をしていたのが蹄鉄屋である。蹄鉄は使い方にもよるが、年二回程度の打ち替えをしていたようである。

六、いかけ屋

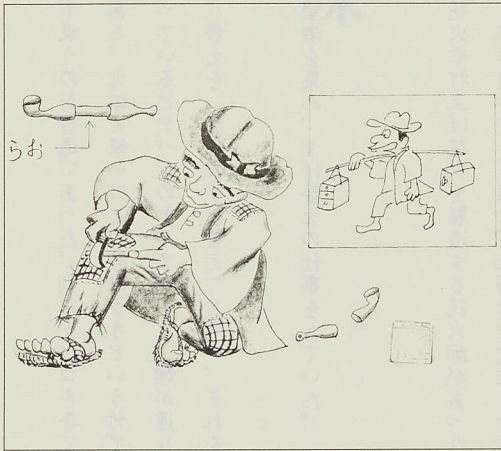
道路ぶちの空地や広場などで、鍋・釜・鉄びん・やかんなどの穴があいたり、ひび割れのした生活用具を集め、修理をしている風景が時々見うけられた。これがいかけ屋である。いかけ屋が来たと聞くと、付近の主婦などが、前記のような使えなくなった用具を持ち寄り修理をしてもらうので

ある。

いかけ屋は小型のふいごを持ち、鉄・銅・アルミなどの材料に応じて、真鍮ろうを溶かして穴や割れ目を接合したり、或は鉄打ちをして止めたりして修理していたわけである。



い かけ 屋



ら お 屋

七、ラオ屋

昔タバコを吸う人は、巻タバコではなく、キセルで吸うのが普通であった。刻みタバコを手でキセルの火口につめて火をつけ、吸い口から吸うのである。火口と吸い口の間はラオという竹で連結している。ラオには篠竹あしばが用いられたが、長く使っているとタバコのヤニでつまり、煙が通りにくくなるので、時々とり替えねばならない。そのとり替えを「ラオのすげ替え」と言い、それを業としていたのがラオ屋である。

ラオ屋はいかけ屋と同じく、時々地域を廻って希望者を集め、すげ替えの仕事をしていた。

八、花火師

明治から大正にかけて、中島地区において、仕掛しかけ花火や打上げ花火を製造する花火師があった。当時、分限者と言われる金持ちの家では、婚礼の日に嫁の通ってくる道に、仕掛けや吹抜きなどを設け、嫁が家に到着すると打上げを何度も上げるといふ風習があった。年間を通じて毎日製造していたわけではないが、前もって註文があると、それに合わせて適当な種類と量の花火をつくるという仕事であった。

第五章 旧象と古木

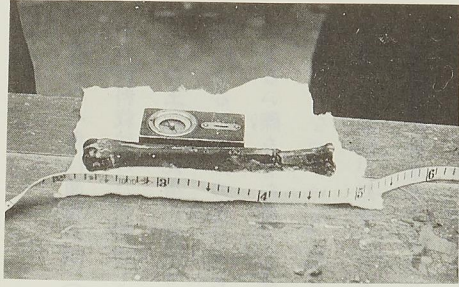
第一節 旧象化石の発掘

1

寺谷の一角に面積六畝(約六町)ほどで、田村国正氏他六名の共有地がある。かつて田村氏が乳牛の飼料栽培のため耕作していた土地である。

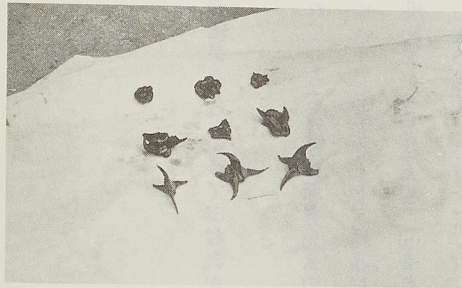
この土地の地層の重なり具合は、本県地質研究の第一人者といわれている石井町篠原勇先生の調査によると、上の部分から下の部分へ順に次のように重なっているという。①チャート、結晶片岩のまるい礫いしを含む層。②茶褐色の粘土層。③淡い白色の粘土層。④灰色がかった粘土層。⑤青色の粘土層となっている。部分的には磨砂として使われることがある火山性の砂がはさまっていて、大昔の火山活動が想像される。

地層は大体水平であるが、地形と同じように北に向かって約十五度ばかり傾いていて、地下資源局の平山健技師の調査によると、南部に約十層南落ちの断層がある。これは台地ができた後の地殻変動によってできたことを物語っていると言われている。



四不象の化石の一部

昭和十三年、東原の田村昇氏が瓦製造の原料として深い層の粘土を掘っていると、地下十四尺（約四・六尺）附近から大きい動物の骨と思われる長さ七・八寸（二十センチ、直径約五寸（十五〜六センチ）の骨のかたまりと、骨のかげら数箇を掘り出した。それがあまりにも大きいので、たたりがあるかもしれないというわさが飛びかっただため、たたりを恐れてそれ以上発掘せず、骨のかげらをもとに埋めてしまった。



ヒシの実の数種

それを伝え聞いた徳島市在住の郷土研究者・故森啓介先生は、当地に來られて「徳島に博物館ができたなら陳列しよう。」と言って、再び掘り出された骨のかたまりを預り保管していた。さらに昭和

十四年頃写真に撮ったが、昭和二十年七月の徳島市空襲の折、森先生宅で焼失してしまっただけらしい。

この骨は、化石哺乳類研究の権威者で東京大学教授高井冬二博士の鑑定で、旧象の右前足の尺骨と橈骨であることがはっきりしている。

3

昭和十六年二月、当時川島小学校で勤務していた篠原勇先生は、高井冬二博士の依頼で、川島町青年団員七〜八人の労力奉仕によって、旧象の発掘作業をしたが、初めて掘り出した田村昇氏が兵隊に行つて不在のため正確な場所がわからず、大体の見当で掘ってみたが違っていたのか、結局掘り当てることができなかった。

4

戦争が終わり、昭和二十四年中頃、篠原先生は復員した田村昇氏から「まだつるはしに、カチンカチン当たるかなり大きいと思われる骨が残っており、掘り出したのは四ツ足の一部で、関節が続いていた。」という当時の話を聞き、また、附近の人々の話も総合して、単に一部分の骨のかけらではなくて、完全な一頭の象が埋まっているものと確信した。

そこで、時の森山村の大久保村長・大久保村議会議長の理解で、人夫四、五人を雇い、更に川島、牛島、西尾各中学校生徒の奉仕作業も得て、篠原先生が中心となり、時には先生自身の多額の私金投入もあり、再び発掘を始めた。

発掘には、石黒美種博士、平山健学士、武田技手等その道の権威者の指導のもと、県博物同好会の事業として推進したが、惜しくも中途資金面でゆきづまり失敗に終わった。

しかし、シノハラビシ、シキシマビシなどの菱の実三種（その中には新種も含む）メタセコイヤ、アノドント（二枚貝）、ヴィヴィパルスなどの化石が発見され、この附近の地層は百万年以前のものであることが確認せられ、また、この附近が沼が湖の周辺であったということが推定された。そこで昭和二十八年、日野義勝、武智実五郎氏などが中心となり、有志の協力を求め、マンモス発掘期成同盟会——古代象保存委員会——という会を創ることをくわだてた。

大阪市大・徳島大の先生がた



5

昭和二十九年二月二十八日、大阪市立大学地質学教授池辺展生博

士、岩津潤博士、柿谷悟助手のお三方を招き、調査をしていただいた。電波探知機による調査の結果、麦畑中央部三坪（約十平方呎）、南の端二坪（六・六平方呎）、西の北隅三坪の三ヶ所で、地下五呎附近に骨が埋まっていることがほぼ確実であると認められた。これで最初の発掘場所もおよそ明らかになった。そこで森山旧象保存会を結成し、大久保純逸村長を会長に、発掘計画をたてたが、またしても資金難のため作業中断のやむなきに至った。

6

昭和三十三年二月、この発掘作業に協力する人、資金援助を申し出る人も現れた。新しく朝日新聞社の後援、徳島の赤松土建、地元吉田建設によつて、二月五日地鎮祭を行い、十八日から発掘作業にかかり、八トンのブルドーザーで三日間に一反（十アール）ほどの面積を、深さ五呎まで掘りすすめた。表面の土は何と千五百トンもあったが、それを機動力で取り除いた。それ以降は、二〇人〜三〇人の奉仕者がスコップを使つて発掘作業にとり組んだ。二十一日には池辺展生



婦人会奉仕風景

三木茂尚教授、藤田和夫助教授をはじめとする大阪市大指導スタッフ、更に、同市立大石井健市助手、徳島大学の中川衷三助教授が現地ですく指導され、また森山小学校で学術普及講演会と映写会が催された。

作業は三月六日まで十五日間続けられたが、幸に、毎日よい天気で、発掘作業は順調に進められた。その間、麻植郡連合青年団、鴨島青年団、消防団、婦人会、地元の方々など、実に延人員が五百人を越す多くの人々によって続けられた。

毎日のように掘り出されたものは、旧象の牙の先端、足の一部、関節の一部、鹿の骨らしい平べったい骨、珍しい哺乳動物の臼歯、骨のかけらが五十箇余り、また、世界で最も古いヒシの実も含めて、三種類百箇のヒシの実、ハスの実、ハマナツメ、珍しい植物の実、二枚貝、巻貝の化石など、じつに様々なものが数百箇にも上った。これはわが国では今まで例のない大成果である。



青年団奉仕風景

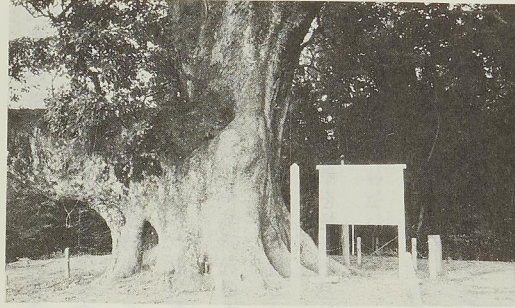
発掘期間中、小・中・高校生、高知大生、また県内外から数千人の見学者が訪れ、多くの人が科学に対して関心を持つようになった効果は、著しく大なるものがあった。また地元の人々が終始一体となって科学研究のために、物心両面に亘って協力、援助されたこと、熱意を示されたことがよい結果を招来したと思われ、高く評価しなければならぬ。

近くには、民家道路があり、雨季には危険があることを考えなければならぬし、雨中での発掘は困難なためこれを第一期として一応作業を中止し、第二期発掘作業は後日にゆずることになった。(本文は飯田義資著の徳島郷土双書「粟の抜穂地の巻」の稿をそのまま記載した。)



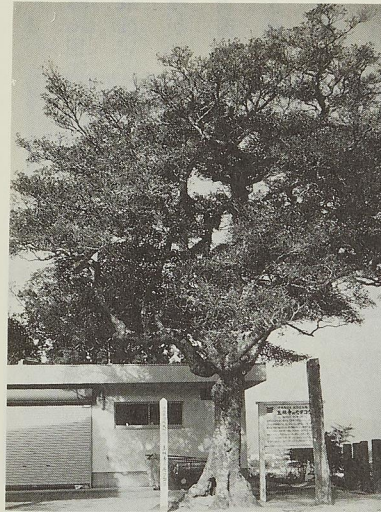
骨格の一部出土に喜ぶ先生がた

第二節 古木

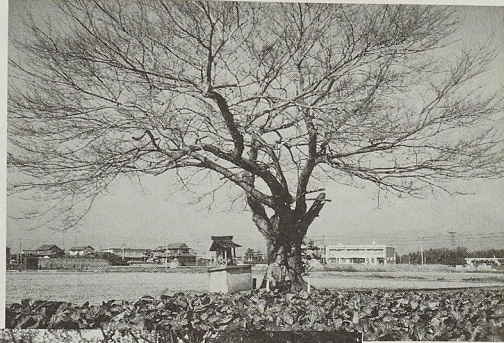


壇の大樟(森藤)
(樹周10メートル)

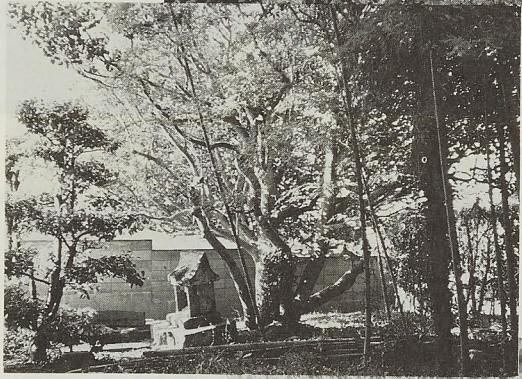
壇の大樟は玉林寺のモクコクとともに県指定文化財の巨木で、
県下で三番目、樹齢約九百年といわれている。



玉林寺のモクコク(山路寺谷)
(推定樹齢約400年)



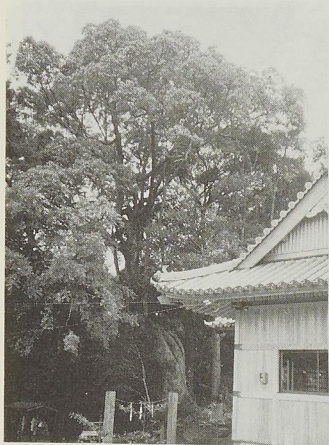
森藤西春日免、森西友一
氏西北の樟の木。一木よく
森をなしている。



森藤壇、渡部莊一郎
氏宅裏の椿。



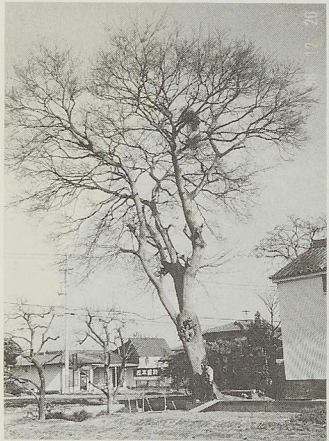
森藤壇、康頼神社境内
の山茶花で毎年みごとな
花を咲かせる。



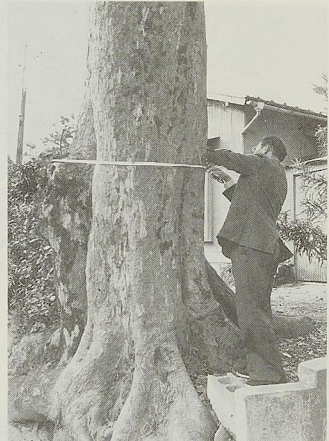
山路寺谷 熊野神社の樟



森藤三谷 八大竜王神社の樟



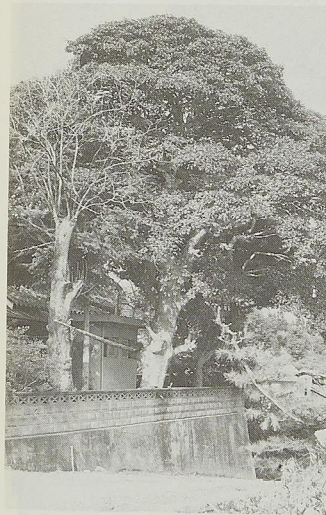
山路西部 岡本昌氏方の榎



森藤向原 桑田武氏方の榎



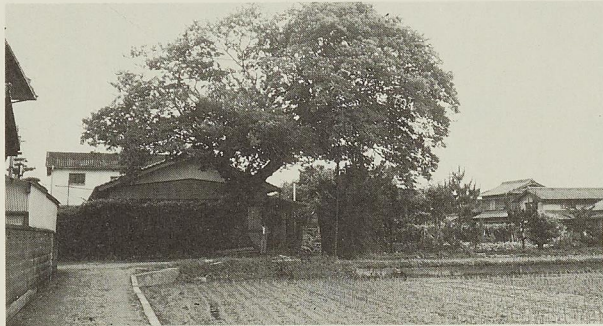
内原 石田正氏方の榎



寺谷 木村尚氏方のもち



内原 荒神社の榎



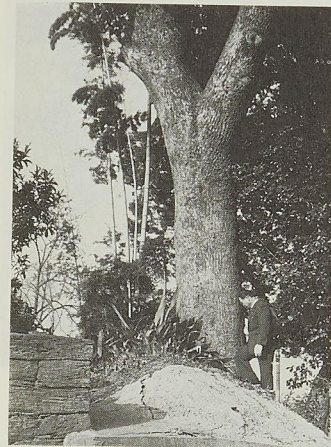
山路宮ノ西の棕
宮ノ西 山根治平氏邸横



山路善正寺のもみ



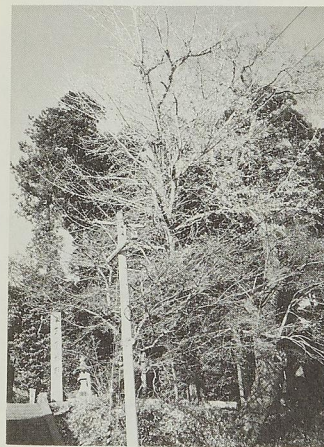
山路寺谷熊野神社の珍木
なぎの木



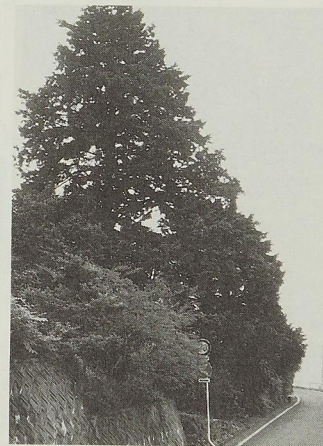
山路寺谷 玉林寺の樟(東の木)



山路寺谷 玉林寺の樟(西の木)



森藤 八幡神社のイチヨウ
真鍋委員撮影



森藤六坊 岸田市男氏方の松

第六章 民俗

第一章 風俗

第一節 俗信

一、庚申

我が国に庚申思想が伝えられたのは、奈良朝末期頃と言われている。初めは信仰でなく、道教の思想から始まり、平安期に入ると宮廷を中心し、貴族の間で宴遊の行事として行われていた。室町に入ると、僧によって庚申縁起が作られ、仏教的になって一般に信仰されるようになった。

阿波国での庚申塔造立の始まりは、明暦年間（一六五五—一六五八）に、五代藩主蜂須賀光隆公の奨励により、淡路国と共に建てられるようになった。美馬郡貞光町端山の武田家の古文書、『貞光谷見聞録』に、藩主からの庚申塔造立奨励のお触書がある。

〔明暦年間以来、庚申石ヲ立テ、庚申待シ、神道デハ猿田彦大神。仏教デハ青面金剛童子ヲ唱へ、イツレモ信者ノ心得次第ナリ〕

とあるように、猿田彦でも青面金剛でも、それぞれ信者の勝手に、どちらを庚申の神としてもよ

い。とのお触れである。阿波では、青面金剛を本尊とする仏教信者が圧倒的に多く、江戸期に建立された庚申塔は、青面金剛の文字碑や像碑がほとんどで、猿田彦は少なく、明治以降になってかなり見られる。県内では、阿波郡市場町大門にある、明暦三（一六五七）丁酉年記銘が最古であろうと言われている。なお文中の猿田彦は、「さるだひこ」と読むのが正しい。

鴨島町内の最古は、牛島辻の寛文四年（一六六四）、二番目は飯尾高ノ原の寛文五年、三番目は山路玉取山麓の寛文六年である。これら初期のものは何れも大形で、塔婆型文字碑である。

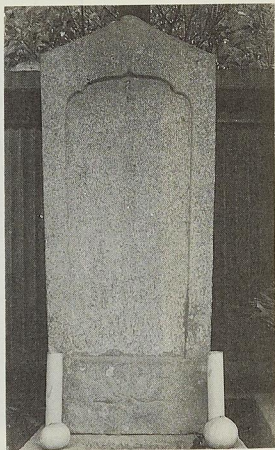
「奉供養庚申待二世安楽也」 「奉供養庚申一世安全後世諸願成就所」

などと書かれている。これら大形文字碑は、元禄時代になると中形となり、年代が下がるにつれて小形化して数も少なく、江戸中期には姿を消している。文字碑の流行期間は五十年余りである。文字碑に少しおくれ延宝の頃から、宝塔型の屋根式が登場してくる。これも初期ほど大形で、年が下るにつれて小さくなって行き、大量に建立されている。江戸末期になると屋根付き、角柱、祠型、舟型、剣型など多様化している。金剛像も腕四本から六本が入りまじり、下に猿二鶏二から猿三鶏二へと流行して行き、明和の頃から青面金剛があまのじゃくを踏まえているのも出現してくる。青面金剛像碑は昭和まで続くが、大正昭和期のものは講中共立がすたれ、個人が信仰で寄進

したものが多。猿田彦の文字碑は少しおくれ登場し始めるが少なく、初期は塔婆型だが後に多様になり、幕末から上部の尖った剣型になり、昭和まで続く。庚申の行事は、六十日目に回ってくる庚申の夜、講中の者が氏堂や当屋に集まり、念仏を唱えたり雑談しながら、眠らずに夜明けを待った。一番鶏が鳴くと暗くても夜が明けたものとして開散した。これを庚申待という。

古代中国では、人体内に三戸の虫という霊怪がいて、庚申の夜に人が眠ると、体内から抜け出して天に上り、帝釈天にその人の罪悪を告げて、早死にさせると信じられていた。それで庚申の夜は眠らずに起きていて身を慎み、念仏を唱えて夜明けを待った。その思想が、そのまま我が国の庚申信仰に結びついて、近世から大流行したのである。

森山地区には、二十二基の庚申塔が建てられている。最古は寛文六年で山路玉取山松寿庵跡のもの、最新は内原松尾地藏堂で昭和三十一年である。その期間は二百九十年に及んでいる。



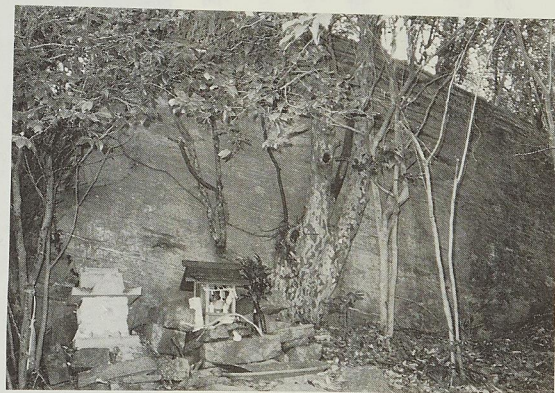
松寿庵跡の庚申(山路)

二、息子石

寺谷上方の山中の急斜面に、上下二つの巨大な青石がどっかと横たわり、下の石を息子石と呼んでいる。息子に恵まれない若い女が、この石に供え物をして、子供が生まれますようにと願をかけ、地上から三層ほどの所にある小さな穴に小石を投げ込み、うまく入ると必ず子が宿るといふ。

三、地藏尊

釈迦の入滅後、弥勒菩薩が出現するまでの五十六億七千万年の間、無仏の世界が予想され、その間、六道の輪廻(死者の魂が生死をくり返し乍ら、六世界を永遠にめぐって苦しむこと)に苦しむ



祠のうしろに横たわる巨大な石が息子石
(山路寺谷) 真鍋委員撮影

地区	場所	造立年月日	西暦
1 森藤	東森藤地藏堂内	室町時代末期頃	
2 中島	桑ノ内地蔵堂内	享保十三年九月二十四日	一七二八
3 山路	向麻山麓吐月庵内	延享二年七月二十四日	一七四五
4 内原	十王堂脇	宝暦六年七月十五日	一七五六
5 山路	山路屋敷地藏堂内	天明五年十一月二十四日	一七八五
6 内原	松尾地藏堂内	天明年中	
7 森藤	飯尾境地蔵橋の東	文政元年七月二十四日	一八一八
8 山路	神ノ木団地の西道端	弘化四年九月	一八四七
9 中島	西部松賀邸西側	明治二十八年七月二十四日	一八九五

人々を救うのが地藏菩薩であるという。森山地区にある講中などを単位として、建立した地藏尊を造立年代順に表にしてみた。寺院の境内へ壇家などから奉納したものや、墓地に墓碑として建てたもの、または八十八ヶ所めぐりのへんろ道の、道しるべに刻まれたものは含まれていない。

東森藤地藏堂内のもは、室町末期頃のものであると言われている。写真は歴史森藤村にあり。



子供の夜泣きをなおす子育て地藏
(山路神ノ木)

四、光明真言供養塔

江戸中期以降から流行した石碑で、板状の青石に「奉唱光明真言百万遍供養為二世安楽也」

などと刻み、建立年月日や施主・講中の名が書かれて

いる。他の石造物より大型で背が高いのが特徴。光明真言は梵語で読誦する。

「オン、アボキア、ベイロシヤナウ、マカホダラ、マニ、ハンドマ、ジンバラ、ハラバリタヤウシ」
この御真言で加持した土や砂を、死者にふりかけると、極楽往生すると言われている。御真言を講中の者が声を合わせて奉唱し、その合計が十万遍、百万遍、二百万遍など、目標に到達すると、満願祈念として供養塔を建てたのである。一人が一回に唱える時間を八秒としても、一方遍唱するには二千六百時間を要する。毎日二時間ずつ唱えても四年かかり、五十人の講中では百万遍を奉唱し終えるに八カ年もの年月を要する。

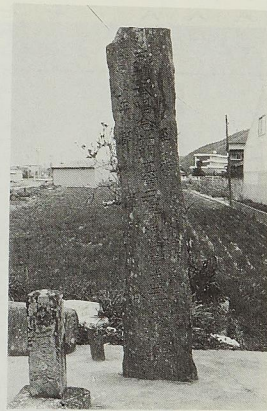
徳島県内には六億六百万遍を最高に、五億、三億、一億五千万、一億五百万、一億、三千五百万

など、気が遠くなるような回数から、最少は十万遍まである。森山地区には十三基あって、最高は三百万遍、最少は十万遍が二基。最古は寛政九年（一七九七）、最新は明治二十八年（一八九五）で、その多くは文政・天保年間の約三十年間に集中して建てられている。関連記事は本書各村の歴史参照。町内で最も新しいのは、牛島宝王院の昭和三年、牛島市瀬の中乗上郷の昭和七年がある。

五、おふなと

岐神と書き、古事記や日本書紀にみえ、その歴史は古い。岐は道の辻や分岐点のことで、辻は悪霊の入りきたる所と信じられていた。そこに道祖神や岐神、塞神を祀って疫病や悪霊の侵入を防いだ。平安時代に入ると、道行く人を守護し、悪鬼を防ぐ神としてこれらの神は、道祖神と同一視されていた。ふなど神は夫婦の神から成り、男神をやちまた彦、女神をやちまた姫という。

この二神には十二人の子供があり、おふなどさんに供え物をする時は、声を出して拜んではならない。その声に子供達は供え物の場所を知って、先に食べてしまい、おふなどさんの口に入らないとの俗信がある。江戸時代になると、道中の役目からぬけ出して、悪霊や悪病から一族や家族を守



内原松尾の地蔵堂境内にある光明真言供養塔

る神として、屋敷の内外に祀られるようになった。石造りや木製の小祠、石かまご、または土の焼物の祠の中に、御神体として自然の丸石を一個、または数個入れている。二つ以上になると、大小が普通である。

六、野神

元は土地の守護神で、神代記に祭神は鹿屋野比売神、またの名を野椎神とある。別名茅野姫命といい、山の神である大山祇命の妻で、野を守護する神である。江戸中期から農耕の神として信仰されるようになり、耕作での主な役割をもつ牛の安全と死霊を祀る風習へと分化した。更に農作の担い手となる子供が、健やかに育つ願いをこめて、百姓の子供の護り神とされ、子供の奉納相撲が行われるようになった。

祭日は地方によって農作物の種類が違ふし、収穫期も異なるので、農作の神様らしく祭日は地域によって別々である。森藤の田中にある野神さんは、毎年土用の入りの日に、子供相撲が行われている。戦後まで、大人が三人で抱える程のセンダの巨木があったが、その後には伐られ、今は二世が太木になっている。野神さんは小さな祠で、個人が数軒で祀り、多くても集落単位で祀る土俗的な神

様である。中には例外もあつて、石井町浦庄諏訪にある野神社は、この神様としては珍しく広い境内をもち、本殿も拝殿もある神社の構えで、子供相撲が盛大に行われ、子供神輿が出て氏子の家々を回ってねり歩くという、県下で最大級の神社で、お祭りも季節の御祈禱を含めると、年に四回も行われている。

七、地神

地神さんの祭日を社日といい、立春と立秋後の五番目の戌の日を祭日としている。社とは中国では土地の守護神のことで、この日に社を祀り、豊作を祈った。

社の祭りは、天平十八年(七四六)に、中国から日

本へ伝来したという。のちに地神とか、地主神と呼ばれていた日本固有の土地の神と習合して、日本の農事暦に適した種まき時の春分と、収穫期の秋分に祀るようになった。

徳島県内にある地神碑は、寛政年間以降のもので、古いものではない。第十一代藩主蜂須賀治昭が、寛政元年(一七八九)に、名東郡富田浦(現徳島市伊賀町)の国魂彦八幡宮の祠堂、早雲伯耆



地神碑 (山路田淵)

古宝の意見をとり入れた事に始まる。

美馬郡貞光町武田家文書によると、寛政二年に藩主は地神塔建立のお触書を、阿波と淡路の各村の庄屋に出し、地神碑を建てて春・秋の社日に地神祭りを行い、農民を休養させたという。現在県内の地神碑は、二千基を越すと推定されており、ほとんどは氏神の境内にあって、造立年号は書かれていない。ふつう北向きを正面とした五角柱で天照大神を正面に、大己貴命・少彦名命・埴安媛命・倉稻魂命の五神の名が刻まれている。

昔は地神さんの祭りは、農家の数少ない休日、この日が来るのを指折り数えて待った。この日に畑に出て土を掘ると、「地神さんの頭を掘る(怪我させる)」と言って畑仕事を禁じ、氏神の森へ行って地神祭りをした。農家では米の飯を炊き、すしやおこわ、団子などのごちそうを作った。また秋の地神さんには、さつま芋の初掘りをして食べるのを楽しみにしていた。

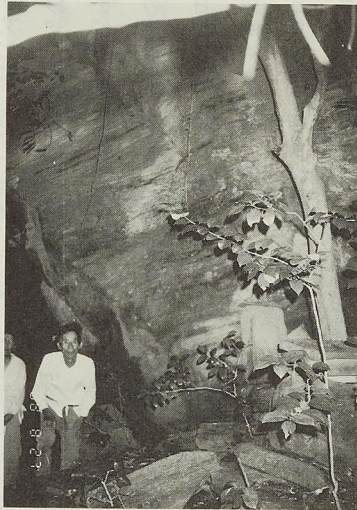
八、山ノ神

古代社会では、天狗が山の神と信じていた地方もあったが、やがて大山祇命などが山ノ神として信仰されるようになった。大山祇命は筑紫(九州)の国津神で、山を領し支配する代表的山神であ

り、その娘の木花咲耶媛も同じ山ノ神である。この神は天孫ににぎの尊の妻と言われ、俗説ではひどい不器量(ブス)だったという。他の女はみな自分より美しいから、女が山ノ神の森へ入ると機嫌が悪く、大風大雨になり山が荒れると言われる。女房が怒る事を、山ノ神が荒れると言うのはここから出た言葉である。

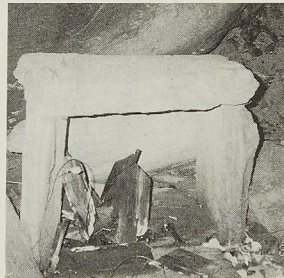
しかし木こり・木出し・炭焼き・木地屋・こりき・焼畑・猟師・柴刈り・草刈り・松茸や山菜とりなど、山で働く者達の安全を守護する神様であるから、深い信仰があった。

室町期や江戸初期には、まだ山中に祠を建てる習慣はなく、奇岩や怪石を御神体とし、大木を山ノ神とした所もあって身近にある物を適当に拝んでいた。狭のさす又、尾の見通しは山ノ神



山路中ノ畑山ノ神の巨岩

(山路 山根正一氏提供)



石かまご

の宿る木として、伐るのを禁じた。狭のさす又は、谷間や窪地に生えているY字形の大木をいい、尾の見通しとは、同じ形で並んでいる二本杉や二本松などで、山頂や峠、尾根に生えている大木をいう。江戸中期以降から木造、石造、焼物などの小さな祠が流行し、石の碑も建てられるようになった。森山では六坊堂の女神像（本書歴史の第一節の項参照）が一番古く、山路寺谷にある壇境の山ノ神石碑元禄十年（一六九七）十一月七日がこれに続く。昔は山ノ神の行事は、いろいろ行われていたが、少しずつすたれて行った。明治以降もなお残っていた行事をとり上げてみた。

1 山の口あけ…山ほめとも言い、正月の二日または四日に行う。それぞれ近くの山神社へ集まり、神酒や海の幸、山の幸を供え、山の産物の豊作を祈願して、一年中の山での安全を祈る。それからお神酒をいただき、各自の山へ入って柴や木の切りぞめをして持ち帰る。また枯れすきを刈って帰り、長い箸を作っておく、そして正月の十五日の朝かゆを作り、その箸を使うが、食べる前に口をつけない方を耳に当て、「一年中ええ事聞け、ええ事聞け」と言ってから食べた。

2 じょうもく…毎月の七日、この日は深い奥山や高山へは入らず、謹慎する。特に獵師は殺生を つつしむ。

3 山止め…十二月二十日は果ての二十日と言ひ、山仕まいの日。この日以降は入山しない。（明

治の頃まで）

4 山ノ神講…森藤壇の山ノ神講は戦後もしばらく続いた。旧暦の正月、五月、九月、十一月、十二月の三日の夜、当屋に集まって祝詞を上げ、五目ずしを食べた。当屋は順番で回った。

山路常玄では現在九軒で、山ノ神講が続いている。正月、五月、九月に神主から通知があり、回りに当屋制で夕食後に集まり、間を置いて二回祝詞を上げて散会する。戦前までは宵と夜中と明方の三回祝詞を上げていた。その夜は将棋をさしたり、雑談で夜が明けてから散会した。当屋では五目ずしをして接待したが、現在は神主の夕食だけ準備している。

九、大 師 講

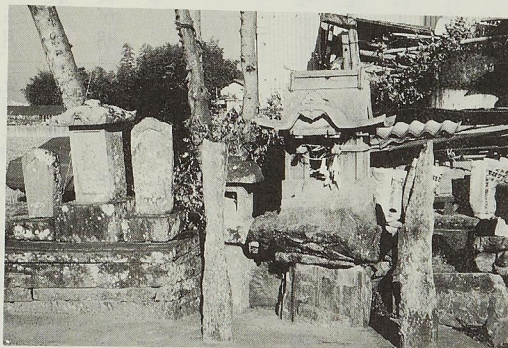
お大師講は、江戸後期頃から広く流行し、明治、大正、昭和二十年頃までは盛んで、どの部落にも十軒前後の隣組規模の講組があった。念仏が終わると当屋では、五目ずし、またはおこわ（明治・大正は粟のおこわ）を用意して、出席者に出した。出席者はそれを少し食べ、残りは用意してきた弁当箱や竹皮に包んで持ち帰り、翌朝家族の者が分け合って食べ、お大師さんのご利益を分かち合った。現在森山地区には中島の中筋、内原東部、山路常玄、山路中央、森藤宮前の五組がある。

十、火伏せの神

神話時代の英雄、日本武尊は賊によって火攻めにあい、若くして死んだが、尊の魂は白鳥となって、炎の中を脱出したと言われる。その神話をもとに、一般では火災から家を守る信仰として、火伏せの神である白鳥神社や秋葉神社を祀るようになった。在所の片すみなどにこれらの小祠が建つようになったのは、江戸中期以降である。東森藤の地藏堂の北側に秋葉さんという小祠があり、在所を火災から守る火伏せの神として祀っている。

十一、馬頭観音と万人講碑

死んだ馬の供養や、生きている馬の健康を祈って、万人講や馬頭観音の碑がある。牛馬が死亡した時、万人講という連帯相互扶助があつて、村の家々を回って金を募り、次の牛馬を買い入れた。この金は返済義務はなく、金が余れば万人講碑を建てた。森山地区には七基の碑が残っている。



中央の祠が秋葉神社、左は庚申塔
(東森藤)

第二節 芸 能

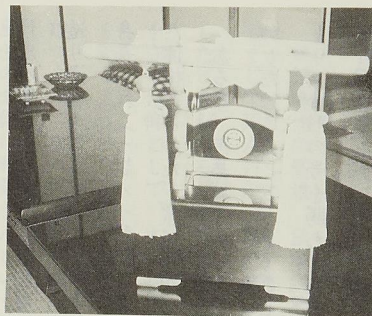
一、義 太 夫

幕末の頃、森藤に吉村武一郎という人がいた。祖父の初代忠左衛門の時代から吉田屋と呼び、豪壮な邸宅を構えて造り酒屋を営んでいた。二代目忠左衛門(武一郎の父は、身長六尺(一肘八十寸)もあり、しかも肥満体で堂々とした体格であつた。常に馬が好きで、名馬も飼っていた。



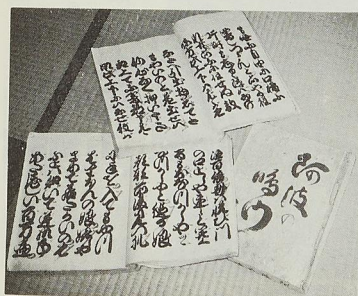
義太夫の野舞台は田んぼの中に作られた
(飯尾 深見利実氏提供)

ある日、徳島城下の「ヤキチ明神」の境内において、馬揃があつた。忠左衛門は愛馬を連れて参加したところ、ひしめく数百頭の馬の中でも彼の馬は一きわ目を引き、時の藩主蜂須賀公の目にとまり、雛形の号を賜わつたという。その後彼は、阿波藩の大筒指南として用いられ、日を決めて指南所へ通つたが、その往復は常に馬に乗っていたという。



見台 (森藤吉村晴夫氏蔵)

ある日、忠左衛門が下城の途中、人形師が待ちうけていた。その人形師が言うのには、「失礼ですが、あなたのお顔を拝見しますと、実によい御人相をしていらっしゃる。私は人形師として、あなたの似顔をぜひつくらせてもらいたい」と懇願せられた。それから時々人形師の家を訪ねて、美術家としての苦心や浄瑠璃のおもしろ味、また、人形遣いと人形、語り手が渾然一体となった人形浄瑠璃の芸術的価値を知り得たのである。



浄瑠璃本 (飯尾深見利実氏蔵)

忠左衛門の子武一郎氏はこうして父の話聞き、いよいよ浄瑠璃に精を出すようになった。その後はこの道一筋、一日たりとも怠らず、先輩の一言一句の注意をよく聞き、研鑽を積んだのであった。

その結果、明治十六年には、阿波素人浄瑠璃人気投票で大関となり、更に、明治二十六年には別大関山鳥として、義太夫界で推

称されるようになった。

明治三十九年、武一郎氏の東京に際し、敷地出身で時の衆議員須見千次郎氏の紹介を得て、大隈重信伯爵を同邸に訪ねた。

六十畳の広間に、山鳥は三味線の豊沢仙十郎を伴い、かねて伯爵が所望であった「菅原伝授手習鑑四段目吃の又平(俗称吃又)」を語り聞かせた。ところが、その妙技に感嘆した大隈は、自ら筆をとり、『南海大掾』の称号を贈られ、同時に、烏帽子及び素袍(かざり気のないはんこでんちゅうの類)を贈られたという。

帰郷後間もなく、郷土の有志が相はかり、南海大掾名広めの人形浄瑠璃芝居を行った。この時、近郷のファンはもとより、他府県からも同好の人々が多数集まり、毎日押すな押



阿波木偶人形 (飯尾深見利実氏蔵)

すなわの大盛況で、大入満員の観客であった。また、武一郎氏は父に似て馬を飼い、時々これにまたがって下龍流の馬術で心ゆくばかり乗りまわしたと伝えられている。そこに居あわせた人々は、この馬術の妙技にただ見惚れるばかりであったという。

ちなみに馬術は下龍流の奥儀を極め、免許皆伝を得ていた。また剣術でも柳生流を学び「一勇齋」と号して、その名をなしていた。

昭和四年、七十七歳で没したが、その戒名に『丹声院殿釈南海大掾大居士』を贈られ、今にその名聲が高い。

大隈伯爵から授けられた称号記

吉村 頼信

音曲淨瑠璃ノ絶技ヲ得タル越前大掾藤原明里ノ流ヲ汲ミテ一家ヲナス 余之ヲ聴クニ 其ノ技真ニ妙境ニ入ルヲ以テ南海大掾ト称ス可シ

明治三十九年 三月

伯爵 大隈 重信

印

今も吉村家には数十余冊の淨瑠璃本がある。

掾号について

掾号は芸能人や、工芸人に対する最高名譽の称号である。

掾号には大掾、掾、小掾の三階級がある。

二、たたら (踏鞴)

川で砂鉄を集め、踏鞴ふみこふきによる精錬法は、わが国では素蓋すまのふた鳴尊なるのみの時代に早くも中国から、広島県、島根県へ伝えられたと言われている。

阿波国へ伝わったのは、今から千五百年くらい前のことであろうと言われ、鴨島町の山麓地帯の古墳から、鉄で造られた諸々の生活用品、武器類が発掘されているところから、この頃すでに阿波にも金属製品が造られていたと考えられる。

昔、吊鐘を造るには鉄または銅を広島、島根方面から買い入れ、その地方の製造法によって造ったものと言われている。

江戸時代から明治、大正の頃は寺院の鐘を造る場合、通称「鐘鑄」という踏鞴を使った。

三十名を一組とするたたら組が、近郷から、また、郡外からも幾組も集まり、その組数五十から六十組にも達したという。そして、「エイエイサツサ、エイサツサ」の掛け声も勇ましく、互いに競いあいながら梵鐘製造の材料である銅や鉄、すずを溶かし、これを鐘の鑄型に流し込み吊鐘を造ったのである。

組を構成する係には、①音頭出し一人、②世話人二人、③拍子木四人、④ざい振り三人（子供）、⑤踏手二十人（壮年）、計三十人である。

大正時代に森藤では、三谷に南藤組、東森藤には錨組というたたらがあつた。そして、音頭出しにはそれぞれ南藤組に楠伝十郎、錨組は石田茂三郎が美声を競いあつた。錨組は傘、襦袢などに錨の印がついていたという。また獅子舞を踊る若い衆の襦袢にも錨のしるしをつけていたと言われている。しかし、最近のカネイは儀式化された「たたら踏み」にどまり実際の鐘鑄作業は現地で行われるのではなく、近代工場で専門の技術者である職人の手によって造られている。

最近たたらを踏んだ例として、昭和九年四月泉智等像建立時に一度、昭和三十二年四月八日玉林寺の梵鐘が設置された記念行事として第二回目、また、昭和三十四年四月十一日藤井寺梵鐘が設置された折の行事として第三回目と、三例しか行われていない。

三、鐘鑄の庭ぶみ

若い衆 子供し 鐘鑄の庭ぶみやとくれ

叔父が音頭を出してやる 叔父さん踏んでも大事ないか

叔父さん大事な大事な 大悲大悲の苦力にて

悪魔を払う鐘じゃもの そんなら踏め踏め ヤッシツシ

師々獅子舞まいまいこぼし すもうや馬ごと軍ごと

つぶて遊びをするよりも たたらを踏むのがおもしろい

面白いほど極楽世界

罪も七つや八つ九つや 十から覚えた足拍子

拍子腹巻き鉢巻きしめて 今はつぼみのけしぼうず

けしぼう とさぼう むさしぼう 七つ道具のつき揃うたも

無事な体も親の恩 忘れな忘れな叱られな

叱る人より鬼より蛇より 天狗さんよりがごじより

二日のやいどがおどろしい おどろしいほどりこうな生まれ

今の若衆はこがしこい 持つてこい持つてこいはよ持つてこい

恋という字は習わねど 色はいろはの書き始め

始めてたたらをわしやふんだ たたらふんだら待つとくれ

叔父さん待つたらどうするぞ うまうま食わしよ酒飲ましよ

向こうの小屋いてしばらく休息

エイエイサツサ エイサツサ

エイエイサツサ エイサツサ

四、たたら音頭

筑前・筑後・肥後・肥前

大隈・薩摩で六か国

筑紫は博多の城主にて

加藤左衛門重氏の

忘れがたみの石童丸

生まれぬ先に捨てられし

父を尋ねてはるばると

紀伊国高野へ尋ね行く

高野の山の麓なる

かむろの宿にかくれなき

玉屋の與次郎を宿となし

母のいくよを残し置き

石童丸はただ一人

なれぬ難所の山坂を

登れば一里上薬師

海山越えてはるばると

尋ねてこれまで来たれども

父をかくす屏風岩

押し上げ岩やねじれ岩

汗かき地蔵を伏し拝み

杖を力に泣く泣くも

あなごの寺をさしのぞき

曇りし声をはりあげて

この御寺におわさぬや

尋ね迷えど情なや

父ぞと答える者はなく

今童心という人は

父上様は何処にと

親子の縁の薄いか

これでどなたも一寸切り

(休息)

エイエイサツサエイサツサ

エイエイサツサエイサツサ

五、石川流太鼓

明治の末頃から、三谷の竹内又平氏は石川流太鼓の名手として知られていた。近郷近在の同好者は、又平に教えを乞い、当時婚礼や各種の宴席で、この太鼓により大いに盛り上がっていた。

三味線との合奏がよくあうので重宝がられ、殊に又平氏の曲打ちのバチさばきは見事で、皆その技にみとれていたという。

三代目竹内新八氏によると、又平氏は讃岐の一国参りのおり、あるところまでこれを覚えて帰り、

近在の者に教えたという。

今多数の愛好者がいる五九郎太鼓は、竹内又平氏の石川流太鼓の流れをくむものである。

六、獅子舞踊りの種類



獅子頭

1 サツサ

2 打ち切り

3 見合い

4 曲

雄獅子と雌獅子が互いに勇壮で、しかも、情愛あふれる姿を踊りで表現している。

七、子ども踊りの種類

1 やっこ踊り

(大名行列の先導)

2 傘踊り

(若い衆と一緒に豊年を祝う踊り)

3 二十四孝

(中国孝子伝の一説で、床に伏す親が、たけのこが食べたいと言うので、子どもが雪の中のたけのこを掘る姿を表した踊り)



子どもの傘踊り

八、獅子



が、むべなるかなである。

獅子舞の踊りも、悪魔を追い払い、邪気を払う見るからに極めて勇ましい踊りであり、そして、また雄獅子と雌獅子の仲睦まじい愛情表現が踊りの中に折り込まれているものであり、獅子の使い手によっては、深い人間愛と通じるものがあり、見る者の心を打つものである。

獅子は悪魔を追い払い、邪気を払う役目があり、神の守り役である。村祭りの際、御神体が神輿にお移りの時も、両脇に位置し、お旅(氏子中を廻る↓陸渡御)も、お供として従い、最後のお入り(御神体が本殿に移されること)の際も、やはり、神輿の両脇に位置する習わしになっている。

お旅の途中で、頭痛のするお年寄りが、獅子の頭でなでてもらうと治ると信じ、頭をなでてもらっている情景によく出くわすことがある

九、獅子舞

森藤の獅子舞は古老の話によると文政年間に始まっているとのことである。

今から約百六十年ほど前のこと、その頃東森藤は藍作が大へん盛んであった。その東森藤に土岐という家があった。名西郡高原村（現在の石井町高原）から作男が来ており、若い衆に獅子舞を教えたのが始まりだと言ひ伝えられている。

この作男の出身地が当時獅子舞のとても盛んなところで、今も勇壮な獅子舞が行われている。

昭和十二年頃まで踊り継がれていたが、日支事変がはじまり、事変は泥沼の様相を呈し、更に、昭和十六年十二月太平洋戦争がおこり、その戦争は熾烈を極め、踊りどころではなくなった。そこで獅子舞も中止のやむなきに至った。

昭和二十年八月終戦を迎え、以後徐々に世の中も落ちつきを見せ始めた。昭和二十二年獅子舞も復活し、村の産土祭には太鼓の音と共に勇壮な獅子舞が村人の目を楽しませた。

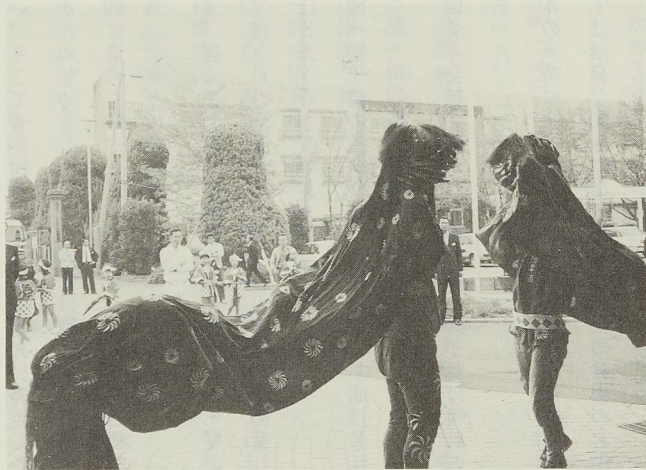
昭和二十年代の後半、社会情勢の変化により、農家の若者はこぞって都会に就職し、従って若者

は減る一方で、獅子を使うことができなくなり、惜しまれながら遂に昭和二十六年再び中止せざるを得なくなった。

昭和四十八年春、若者の間に故郷志向の気運が高まり、伝統芸能への憧れと共に獅子舞復活の話が持ち上がった。徳野光男先生の熱心な協力もあって、森山青年団員にもはかり、準備をすすめた。当時は青年団員もふえ、活動も活発であったのでこれらの力強い後援も得て、話は順調にすすんだ。

昭和四十八年九月二十五日、東森藤の人たちと青年団員が相集い、森山獅子舞保存会を結成したのであった。

長い間休んでいたので太鼓は破れ、獅子頭の



獅子舞

損傷もひどくどうしてこれでは舞うことができない。そこで青年団員たちは資金集めに奔走したのである。廢品集めに、賛助会員募集にと昼夜をわかつたぬ努力をした。その熱意は町当局、町議会を動かす、補助金の捻出、募金など資金調達に積極的に協力を仰ぐことができた。その結果目標額を達成することができた。

青年団員は毎夜東森藤鶴田太一氏らの指導のもと、遅くまで熱心に練習に励んだ。その甲斐あって昭和四十九年十一月十二日、東京青年会館に於て催された全国青年大会で森山獅子舞を発表したのである。この喜びは関係者一同筆舌に尽くせぬほど大きいものであった。

昭和五十一年九月十四日小松島市立江町の青年団へ獅子舞の指導に赴いた。以後三年間は祭礼前に指導に招かれとても感謝された。

昭和六十年十一月第二回目の全国青年大会が全国青年会館で開かれ、再び森山獅子舞は晴れの舞台上で立派に踊りを披露し、喝采をばくしたのであった。

昭和六十一年、青年団員はまたも激減した。往年の大勢によって入れかわり立ちかわり休む間なく動く活発な踊りも見られなくなった。しかし今では活発な動きはないが、産土祭の神輿のお供として命脈は保っている。

森山獅子舞の活躍のあとをまとめて振り返ると、次のようなことを挙げるができる。

大正九年十月 名西郡阿野村二宮（現神山町二宮）へ石田茂三郎、石田磯一両氏が指導に赴いた。

昭和十一年十月 江川遊園地（現在の吉野川遊園地）で行われた徳島県下獅子舞大会に参加し、第三位入賞（ちなみに第一位は高原獅子舞であった）。

昭和四十八年 鴨島町無形文化財第一号に指定された。

昭和四十九年 東京青年会館における第一回全国青年大会で発表。

昭和五十一年 小松島市立江町へ指導に行った。以後三年間は祭礼前に指導に来てほしいとの要請があり決まって指導に行った。

昭和六十年 第二回全国青年大会で発表（会場↓東京青年会館）

十、子どもの踊り

若い衆の獅子舞と一緒に子どもの踊りがあった。
三歳ぐらいから小学校六年生まで、十人〜十五人編成で踊ったものである。大勢の子どもが地域にいたため、それは賑やかであった。

子どもの踊りを教えるのは大変苦労があったが、お祭の晴れ姿を思い、教える者も教えられる子どもたちも一生懸命練習に励んだものであった。

長い袖に紅白のたすき、化粧まわし、それに鈴がついているので体を動かすたびに鈴がなり、その衣裳といい、鈴の音といい愛らしく、美しいものであった。往時は太鼓が鳴り、獅子が舞い、子ども踊りが始まると、大勢の人だかりがしたものであった。

獅子舞と一緒に子ども踊りも盛衰の歴史をたどりながらも、此頃では社会情勢の変化を背景に衰微の方向に向かい、今ではあまり見られなくなった。



十一、獅子舞認定書と指定書

第一号

認定書

森山獅子保存会会長 藤川竹夫殿

芸名等獅子舞及び用具一式

(太鼓二対、計四個獅子頭衣裳一式)

鴨島町文化財保護条例施行規則第六条の規定により
鴨島町指定無形文化財の保持者として認定します。

昭和四十八年十二月二十五日

鴨島町教育委員会

第一号

指定書

名称 森山獅子舞(太鼓二対計四個獅子頭
衣裳一対)

保存方法 昭和四十八年九月二十二日森山
獅子舞保存会を結成し郷土芸能文化発展
の為保存することになったのでその管理
は保存会に委任する

右のものを鴨島町文化財保護条例第三条の
規定により鴨島町指定無形文化財に指定し
ます。

昭和四十八年十二月二十五日

鴨島町教育委員会

第三節 方言考

- 1、ヘンシモ：阿波独特の方言ではなく、片時へんじと書いた江戸期の一般用語。元はわずかのあいだとか短時間に使われたが、現在では大急ぎの場合や、少しでも早くの意味に使われている。
- 2、マツボリ：「一握りひとにぎりまつぼり金や冬籠り」の句があるように、人知れず小銭をためる意味に使われていた江戸期の一般語。今では物品を密かに持っている場合にも使っている。
- 3、ヒンツ：方言ではなく、室町期や江戸期には平頭ひらづと書かれて、意外、余分、余計、無用、無駄などの代表語だった。「月の夜にひんづの損はほたるかな」の句がある。
- 4、メンメ：語源は面々めんめんで、各自それぞれの意味。奈良、平安時代から使われていた。今はメンメと略され、「皆がメンメに金を出す」「機械がメンメに動く」「牛がメンメに寝よる」など、人体以外でも個別の物体をメンメという。
- 5、ダチアカン：ダチは埒らちの転化で、馬場の周囲に張られた棚や縄をいい、物事のけじめに使った。昔は意味のない事を埒らちもない、とも言った。阿波では仕事がかどらない時や、農作物や金が

とれなかった場合に、ダチアカンと言う。

- 6、セングリ：正しくは先繰せんぐりと書く。語源は順を追って繰り返す順繰せんぐりであったが、現在では「人や車がセングリにやってくる」など、同じ物の流れ方を指している。
- 7、オリカニ：時折りとか、折にふれての言葉から転化した方言。足がオリカニ痛うなる、息子がオリカニ小使いをくれるなどという。
- 8、テナヤワン：手に負えない事を手に合わないとも言い、阿波では更に転化してテナヤワンとなった。あしこの親父はめんどうでテナヤワン、夏はテナヤワン位草が生えるなど今も健在。
- 9、テンゴウ：無駄な事をテンゴウという。語源は気違きちがひいなど正常でない状態をいった。江戸期になると無駄や下手へたを指し、落書らくがも転合書てんごうがきと言った。「有明あきや転合書てんごうがのへ字じなり」の句があり、ふざけやいたずらを転合の皮とも言った。「転合の皮(川)辺も涼し水なぶり」の句もある。
- 10、コサイ：よく聞きとれないのをコサイが分らんという。巨細こさいと書き、全てのものを細大もらさずが語源。平安時代から使われていた。
- 11、チカゴスイ：ゴスイはこすいの事であるがしこい意味、チカは近で自分が努力や苦勞せずに、

他人の労作を真似たり利用したり盗むやり方を指し、卑劣な行為をする人をいう。

- 12、ジルイ：雨で道がじるい、畑がじるうなったなどのジルは汁の転化で、古くは水気の多い事をシルといい、年中恒例記に「大雨にて御庭しるき時は」などと書かれている。後に表現が細分され、シルは樹液や煮汁。ジルは泥田や粥などに分かれた。

- 13、ヤニコイ：江戸期には弱々しい、柔和、にやけている、役立たずなどの代表語として、西日本で使われていた。「住吉のきしませ振りに粘うしてやにこき人は松(待)に気の毒」待ちぼうけを喰っているやにこい男を見て、うたった歌である。

- 14、シブテコイ：しびてこい、てしぶい、ふてこい等、複数の言葉がある。頑固、意地っ張り、変こつを指す方言、語源はしぶとい。

- 15、チカメグラノシ：数人以上の近隣の人を指す方言。チカは近辺で、メグラは自分を中心とした周囲の事で、漠然とした適当な範囲内。シは衆のこと。

- 16、ハシカイ：ハシカは稲や麦のノギの事で、皮膚にふれるとむずがゆく、これをはしかいという。上古からあった言葉で、挙動が素早いのをハシコイとも言った。今は口達者な人を陰口で口がはしかいともいう。「はしかくは今からな寝を稲むしろ」の句がある。

- 17、ブツガヘトモイワン：質問しても、知らん顔をする相手の態度を指す言葉。元は屁がブツとも言わんであったが、腹立たしきに逆に言ったのが面白く、常用語となった。今では意味が逆さまと気付かないまま使っている。クジのカスを引いて、スカと言うのと同じ。

- 18、ヨウケ：数や量が多い事に使う。沢山、いくらでも等の余計の言葉から転化した。

- 19、ナガセ：奈良・平安期には梅雨や秋雨の長雨をナガメと呼び、万葉集に「秋萩を散らすながめの降る頃は」古今和歌集に「つれづれのながめにまさる涙川」などが詠まれている。阿波ではナガセと転化して梅雨期だけを呼ぶ。

- 20、ウタテイ：長雨で衣類がしめったり、仕事中にずぶぬれになる場合等に使う。心に染まない、嫌だ、情ない等が語源で平安後期から登場した。義経記やお伽草紙にも見えている。

- 21、ボニ：盆をボニという。方言でなく、ソとニの使い分けが未確定だった平安期には、盆をボニといい、以後永く使われてきた。同時代に銭をゼニと発音したものは、今も正式に使っている。

- 22、コヨチ：手荷物を小さくまとめる状態などに使う言葉で、小寄せがなまったもの。

- 23、ヘソバル：ヘソは細の転。戦国期以降から、牛馬や犬猫が小便するのをバルと言ひ、後には下品語で人の放尿も指した。更に分化して水分が抜けて干からびる事を阿波ではヘソバルという。

- 24、シヨウタレ：シヨウは精の事、タレは糞尿ふんじょうが出ている様さまを指し、不精者、不潔者などを最低に評価した方言。
- 25、シヨウヤク：入念に手間をかける場合に使う。平安期に所役しよやくという用語が生まれ、行政や役職や事務に用いられていた。阿波ではシヨウヤクとなまって手間をかける状態に使っている。
- 26、ヒダルイ：ふだるいとも言いう空腹の意味。古代の道祖神の一つにヒダル神がいて、峠や野辺に住み、空腹はこの神のなせるわざと考えられていた。後に空腹のやるせない苦しさを、ヒダルイと表現するようになった。
- 27、ヒヨウヒヤク：冗談、こっけい、洒落、ふざけなどを総合して江戸期に新語として登場した。
- 28、ヒンケル：個物体から水分が抜け、干からびたさまをいう。早抜あはぬけるがなまったもの。
- 29、オセ：奈良時代には結婚の相手の男を、女が夫と呼び、兄を妹が兄と呼んだ。のちに子供が大人に對してオセと呼ぶようになった。オはお父上などと同じで敬称である。
- 30、タブネ：旅寝たびねの転で、元は住居や寢床以外で寝るのを旅寝と言った。いつの間にか夕食後に、茶の間で寝込むのを指し、なまってタブネとなった。
- 31、ケナイ：平安時代からあり、不意に訪れて飯を食う者や居いそうろうなど、家族以外の者が予定

- 外の食事をするのを家内人けいなんにんと言ひ、後に物が早くなくなる事をケナイと表現するようになった。昔はこれと反対に、食事どきに食べないのを無財むざいという言葉があった。今も山間では物が仲々へらない時に使うが語源は無財むざい餓鬼がきの略で、貧しすぎて食物が咽を通らない餓鬼がきのたとえ事。
- 32、ネンガケル：いちずに打ち込んだ心や執念で物を得ようと、常々機会をねらっている状態。
- 33、モエル：大雨で川の水がモエて来たなど、増大するさまをいう。木の芽が崩おえるから出たもので、芋いもがようモエとるなど、ふくらみ、肥大する事であったが、最近は人口や家がモエよる。犯罪や事故がモエよるなど、数の増加にも使っている。
- 34、トコマエル：トマエルという人もある。捕らえると押おまえるを合体して生まれた方言。
- 35、ゴトウニン：媒妁人ばいせつにんのこと。鎌倉期に、訴訟そとごを審理する引付衆ひきつけしゅの長官を頭人と呼び、その後民間では、祭りや民事の世話役を御頭人ごとうにんという代名詞で呼んだ。阿波では仲人なこうどの世話役を今もゴトウニンという。古くは祭りの当屋も頭屋と書いた。
- 36、サドコイ：室町時代に、素早い事を早速すざつといい。阿波ではサドイ、サドコイと転化した。
- 37、トロコイ：室町期の能狂言のうまじげんに愚鈍な男の役名を、頓魯作とんろさくという名で使われていた。それが受けて、頭脳や動作のにぶい人をとろさくと言ひ、阿波でトロイ、トロクソなど多様化した。

38、テンブ：冒険や危険にいとむ人。語源は出たところ勝負や自暴自棄になる人を転蓬、またはてんぼと言った。てんぼがテンブとなまったもの。

39、ゲトス：競争で最下位の者を酷評した言葉。下等のことでスは最低という下品な接尾語。

40、ダイマシユウニコワル：打ち身やねんざの痛みをいい、刃物で斬った痛みと違うのを区別している方言。コワルは阿波の古語で、腹コワリが最も古いらしい。ダイマシユウニは、だるいよ
うなの意味で、切り傷とねんざの痛みを混同している標準語よりも、区別している徳島の方言
が、はるかにすぐれた言葉だと思う。

41、味もシャシヤラもない：元はかざり気がなくさっぱりしている事を洒落、酒々落々など言っ
ていた全国の共通語。味気ない食物に置きかえて「味もシャシヤラもない」という。

42、オンデン返し：うらみの仕返しをする怨念返しのこと。阿波人には怨デンがすぐ味に感じる。

43、傷がツツク：頭がツツク、腹がツツクなど体内の痛みを使う。いずれもうずくの転。

44、アリシカイサン：カイサンは室町期の年貢や借金を全部納めたことを、皆済と言った名残り。

45、イガル：元は人がかみつくように言う状態や、犬がほえる事を吠みとか吠むと言った。阿波で

は犬には使わず、人の怒声や大声で叫ぶのをイガルとか、イガリマクルという。

46、ツンナシ：粒なしの事で、奈良・平安期には夜空の星粒をツツと言ひ、穀物の実もツツと呼ん
でいた。無益な話は粒がないのと同じというたとえごと。

47、シマツ：無駄使いせず、節約する事をいい、始末から別の意味で分岐したもので、江戸期には
ほぼ全国で、節約用語として通用していた。

48、トトケル：飴や団子や紙などが雨に打たれ、水につかって表面が崩れた状態をいう。元の形に
帰すに不可能なひどさを、溶けるだけで物足りず、溶を二つ連続して意味を強めたもの。

49、ドビル：水によって表面だけでなく、内部まで溶けたり腐乱した状態をいう。ほどびるから転
化したもので、ホトを合併して下品に「ド」と発音した阿波特有の表現法。

50、セコイ：平安・鎌倉期に狩場で獲物を追ひ出す人夫を勢子と言ひ、室町期には、酒席で末座の
者共に酒をついで回る身分の低い者をセコと呼んだ。また細かい事に気を配り、精を出すのを
セコが入るとも言った。後に一生懸命働くさまや苦しい事を阿波ではセコイと言う。

51、ツベクソイウ：関西弁で尻をツベと言ひ、ツベクソは肛門のまわりに残っている汚物で、人体
に付着している物のうち、最もいやな不用物。必要のない言動をたとえたもので、ツベクソ言

よっておこられた、などは日常語。ドツベクソぬかすなどが、彼奴はツベクソだけ言うて戻んだ。など。

52、モノロイウ：常識から外れた難しい面倒な事を言う人を「あいつはモノロばかり言う」と非難する。山分では、かずらやいばらがからみ合って、身動きも出来ない場所をモノロとか、かずらモツソウという。どちらにも先に進む事が難しく、面倒な事で一致している。

53、サダチ：サは早の事で、降るのかなと思うと、早や大粒の雨が降って来るのでサダチという。

54、イロベル：鎌倉時代からすでもてあそぶ事をイロイとか、イロウと言ひ、一編上人いっぺんじょうにん聖絵せいゑに登場している。後にイロベとなり、ルは接尾語。

55、フスベル：煙でいぶす事を言ひ、昔いろりいろりで薪まきをたいていた頃は、屋内や天井が黒くよこれ、これをフスボルと言った。どちらにもすくべの転。

56、一つハザメ：挟はさめと書く、物と物とではさまれた間の事で、平安期に逆のぼるらしい。見聞愚案記に「我が家には一代はぎめに名人が有ると物語る也」が見える。

57、トヒクロ：人の意をつく言葉や、奇想天外な考えを持つ人、また普通の人からみれば、うそとしか思えない話をする人を突飛とどひと言ひ、トツピから転化してトヒになった。クロは阿波弁の助

詞である。

第四節 森山の地名考

一、森 藤 地 区

(1) 森 藤 古代人は三谷から山路へ行くのに、壇へ上って越えていた。越える所を「タオ」という。タオは「トウ」とか「ドウ」とも呼ばれる。壇の台地は、平原状で盛れているため、壇の土地を「盛れタオ」と呼び、のちに「もりとう」と転化したと考えるのが順当で、のちに発音に合わせ「森藤」の字を当てたのである。壇は森藤発生の地である。

(2) 向 原 向むかは地名では、主に對する從の立場となる。東森藤の在所が南に向いているのに対して、相向う土地が「向原」で、東森藤に對する向原という意味である。

(3) 大泉寺 室町期まで、森山小学校辺りに大仙寺という寺があった。寺の建っていた地は山路村常とこ玄げんで、森藤の大泉寺はもと大仙寺領であった。後に、仙を泉と書きかえたものであろう。森山

小学校の南に当たり、東森藤自治会内にある。

(4) 城ヶ丸Ⅱ戦国時代、川島の篠原右京之進長房の別荘があったということが、阿波古城記に書かれており、地名となったようである。

(5) 池 田Ⅱ昔池のあった所で、三好郡の池田町も、山田古つぐが造った池から地名となったといわれている。東森藤自治会の南方の水田地帯をいう。

(6) 滝の上Ⅱこの滝は、山獄で崖のことが、すなわち、崖の上の土地ということであろうか。壇の南にある。

(7) 桑 田Ⅱ室町や江戸期には、蚕を飼う量が少なく、ほとんどアゼ桑で間に合わせていた。桑をまとめて畑に植えているのは非常にめずらしく、これが、桑田とか桑の元などの地名となったのであろう。東春日免自治会に含まれている。

(8) 細 田Ⅱ細長い地域のこと、東森藤お地蔵さんの東の三叉路から南に向かって農面道路に通ずる道の西側に位置する。

(9) 正 尺Ⅱ農免道路の北、富尾床材から北及び西の方向約三百坪四方を指し、西は田中自治会集会所附近までの地名である。古語では水が少しずつ流れるのをしよろという。山麓のしぶけた水

が湿地帯を幾筋にも分かれて流れ、あるいはたまった状態から生まれた地名か？

(10) 春日免Ⅱ春日神社領の免租地か、上古に粟国の屯倉のあった所とも言われ、その所在地を春日とか春日部という。春日免の免は、部の転化かあるいは免租の意と思われる。

(11) 三 谷Ⅱ三は水のでて字。水流のある谷のことで、一丁谷・大谷・西浦谷の三つの谷を合わせて流れる谷のことを言う。

(12) 一の坪Ⅱ桑里制の遺物か？壇台地を支える西壁の急斜面の地名。三谷扇状地と壇台地との間は、瓢箪のくびれのような形をした、急斜面の一ノ坪で結ばれている。

(13) 西の鼻Ⅱ壇台地の西部で、滝の上の西側、貯水池から牛舎へ通ずる南北の農道の西方に当たる地。

(14) 森の奥Ⅱ森は杜で神社のこと。すなわち、神社の奥の方のこと。

(15) 宮 前Ⅱ八幡神社の前(東方)に広がる集落地をいう。

(16) 福 井Ⅱ井は井戸の外に、川や水路の意に使用される。福はふくむのあて字。田中自治会の西の端で、飯尾地区の川原尻に接している。

(17) 四反地Ⅱ八幡神社のあるあたりで、もと、一筆四反かっきりの土地があった所。(四反地は穴吹

町。五反地は神山町・鴨島町上下島と喜来。六反地は上浦。九反地は西麻植。三反地は牛島などがあり、いずれもそのあたり一帯の地名となっているが、元は、一筆かっきりの土地であって、そのあたりを代表する地名になった。この他に、八貫地・五俵地（木屋平）など、収穫高で呼んだ土地もある。また、穴吹の四合地は、年貢を四合納めていた土地から生まれたといわれている。

(18) 西浦谷 浦は日当りの良い、うらかな東面とか、南面にある土地で、三谷の西側にある。

(19) 六坊 伝承によると、平康頼の晩年に、六坊と称する坊院を建て、有徳の僧六人を置いたのが地名のはじまりという。神山へ越える梨ノ木峠へ登る途中にあり、山腹に数軒が点在している集落一帯をいう。

(20) 中 尾 尾根の中でも、大きく中央に突き出している尾を指す。壇の真南に当たり、三谷川の東側と三谷川から一丁谷までの間の地域。

(21) 笠 岩 三谷川の西側で、笠のように覆いかぶさったような岩石。

(22) 亀ヶ尾 壇集落の上方にある。通称お林（藩有林）の西南にある尾根に、お亀石という亀の形をした大石があり、亀ヶ尾と呼ばれている。亀のような形の大石があるので名づけられた。

(23) 深 堀 深く掘れこんだ谷地の所で六坊の南面。

(24) 一町地 森山村役場の西南に方り、一町地と称せる地名あり。村人の口碑によれば、麻殖保司職平判官康頼の葬場の地なりとて、昔より同地に居宅建築せば、凶事ありとて、今日に至るも建築をなさず、面積一町四面余あり。（麻植郡郷土誌P三七二より）一町地は春日免にある。

(25) 清 水 清らかな水が流れ出ている小さな沢で、六坊の東方である。

(26) 尖 岩 森藤のはるか南東の山の中に、先端が鋭くどがった大岩がそそり立っていて、とがり岩という。

(27) 平 山 向原の西に接した場所であり、平地の南側で一段高くなった平らな丘。

(28) 橋 本 春日免の東に隣接した所。昔、谷にかけられた橋を目印として、附近を橋元と呼び、後に元を本の字に変えたもので、山路の橋本も同じ地名である。

(29) 田 中 森藤村田中の地名は、阿波誌にも見える。田が広い地域に及び、その中心的な場所から由来する。

(30) 大 谷 三谷川の源流が流れ落ちる所で、昔は数軒の民家があった。

(31) 下 山 三谷の八大竜王神社附近の、西側一帯の山麓をいう。山の下部に位置しているので、そ

の名が付いた。

32 壇ノ鼻 壇の西北で、台地が尽きて斜面に移る地点をいう。

二、山路地区

(1) 山路 山路村は上古三寺村と称したる由にて、古刹三カ寺あり、大仙寺・蓮花寺・十川山仙光寺等にして、大仙寺・蓮花寺は廢寺となる中古より、山路村と改称するに至れり(麻植郡誌 P 三七三)

(2) 中ノ畑 傾斜のゆるい畑地のある中腹の所。神山町の折木へ越える峠近くにある。

(3) 西寺谷 寺のある谷川の西側の方。

(4) 東寺谷 寺のある谷川の東側の方。

(5) 日ノ浦 寺谷の入口にある集落地で、日当たりのよい所。寺谷川右岸にある。

(6) 檜原 昔、檜の茂っていた土地。くぬぎ原、松原などと同じ。現在の長谷自治会のあるところ。檜原谷川の扇状地をいう。現在の長谷の地名は、檜原谷の古名であった中ノ畑谷から転化したものであろう。

(7) 堂原 堂床と同じく蓮華寺の堂宇があった所。岡原自治会内にある。

(8) 神ノ木 榊かきなど神に供える木が、切られずに大木となっていて、遠くからも目標となっていたところ。善正寺以南をいう。

(9) 坂 口 西寺谷の入口を言い、坂の登り口に位置した地域。

(10) 田 刈 田の縁のこと。田の少なかつた昔は、一枚の田でも何かの目標となり、田の南の方とか北とか、そこを起点として回りを指した。現在の中央自治会の西南部をいう。

(11) 常 玄げん 現在も常玄神社がある。昔、常玄入道という僧が居て、その人の所有地が地名となったと言われている。ここには森山小学校・森山郵便局・農協森山支所などがある。

(12) 十二騎 飯尾川の十二騎橋の南東をいう。十二騎さんと呼ぶ塚かづらがあって、凝灰岩ぎょうがいがんの五輪塔があった。伝承では、十二人の人と馬が、洪水で流れて死んだといわれる。

(13) 山路屋敷 善正寺の北東で、昔、山路を代表する実力者の屋敷のあった所。土地は高くなつており、庄屋山本家のあった附近一帯を指す。

(14) 江 淵 飯尾川沿いにあり、川水が半島のように入り込んで、溜ためっていた大湿地のこと。

(15) 道の北 昔、伊予街道と言われた向麻山南を東西にのびた道を起点に、北に広がる向麻山南西の平地をいう。

(16) 東 原 昔の山路村から言うと東方のことで、国一八幡宮や仙光寺をふくむ辺りである。現在では、山路の中心的集落となっている。

(17) 生 福 生蒲の生えるような湿地。すなわち、シブ地でシブけた土地の意。谷合いの大湿地の所で、岡原の東方をいう。

(18) 阿葉谷 阿葉は暴れるのあて字。木も生えないように、削りとられた荒れ地で、上浦境の山地にある。

(19) 広 谷 岡原の東側を流れる谷で、蓮華寺谷の上流。深くなく、浅く広い谷のある所。

(20) 黒 岩 寺谷川の支流で、熊野権現の北の谷をいう。黒色をした大母岩があり、古来から黒岩谷と呼んでいる。

(21) 蓮華寺 山路村の名の起源となった三寺の中の、蓮華寺のあった所で、国一八幡宮の南方約三百メートル付近。

(22) 宮ノ西 国一八幡宮の西側を言い、寺谷川左岸の平地。

(23) 宮ノ南 国一八幡宮の南側で、蓮華寺谷の右岸の地を言う。この谷は、寺谷川の支流である。

(24) 山の南 向麻山の南山腹の地名で、山の南側そのものズバリを指している。

(25) 東 野 山路の最東部の上浦境を言い、低い山や丘が続いている。

三、内原地区

(1) 内 原 室町期に「打原」を名乗る家が二軒あった。この家も土地名を氏としていたようである。

(2) 柳の元 柳の生え茂っていた土地。飯尾川沿いで、山路の江洲と接している。

(3) 松 尾 国道一九二号線をはさんで南北をいう。東は麻植塚と接している地域で、戦国時代に石田氏が紀州から移って来た時の郎党に、真津尾三四郎という侍がいて、屋敷を構えていた所が地名となる。

(4) 田の元 エンとは榎のことで、松の元と同じく榎の大き木があった所。荒神社の東方に当たる。

(5) 前 場 東部自治会に属している。家の多い部落の中心から見ると、日に向かって前の方。前場とは、畑ばかりの広い地域を指す。

(6) 十王堂 地獄の閻魔大王など、人間が現世中に犯した罪を裁く十王を祀つてあるお堂のあるところ。荒神社の西南に当たる。

(7) 西 張 部落の西に張り出した土地。開墾地を墾という、西の墾から出た言葉。荒神社のあたりを言う。

- (8) 松の元―常玄の北に位置する。エンの元と同じく、松の大木が立っていた所からか。
(9) 桑の内―桑は、桑の木の植えられた土地ということ。国道一九二号線以南にあり、東は麻植塚で、鴨島東中学校に隣接した地域である。

(10) 大道南―現在の北部自治会区域にあり、昔の主要交通路の南側をいう。

(11) 北松尾―字松尾に隣接した北側にある。

四、中島地区

(1) 中島―洪水の時は島となる地名。昔は村の南北を流れる二つの川にはさまれていた。

(2) 片山―豪族片山家があった所で、戦国時代には片山壘があった。内原の荒神社の東南方角に当
たる。

(3) 戒野―北東部に戒神社があった。また、昔は南東に祠があったので、戒野の南東部を宮地とい
う枝名の地があった。今もここにある橋を宮地橋という。飯尾川沿いの地である。

(4) 東原―飯尾川の北側にある川成地（河川敷）で、今は田であるが、江戸期には草地で、牛が放
し飼いにされていたので、牛飼原とも言われていた。昔は東原と西原があったが、今はまどめ
で東原という。中島の最南端に位置する。

(5) 沢―中島と森藤とを分岐している三谷川沿いの中島分をいう。沢状の湿地の事で、東原の西
南に続く地点で、中島の最南端である。

(6) 福井―飯尾川の脹らんだ所に沿った地形。諏訪神社のある所で、西は飯尾に接している。

(7) 中筋―在所の中央に位置し、在所を代表する中心的な在家のあたり。L字型をした中島は、瓢
箆のように、真ん中が細くくびれた地形をしており、中筋はその細い筋の地域の東方一帯にあ
る。

(8) 豊郷―美称・豊饒の農地のある所で、中筋の西の地点。

(9) 大止―洪水時に水の勢いを防ぐ蛇かごなどの、簡易土手を大止めという。場所は中塚。

(10) 諏訪ノ元―昔諏訪大明神を創建してあった所で、上下島の諏訪の元に接するわずかな土地をいう。

(11) 中塚―川中島で須賀の出来た所か。

(12) 谷ノ上―三谷川沿いの北岸の地名で、字沢に隣接した上流地域をいう。中島から見れば、谷の上
手に当たるのでその名がついた。